

日本語教育における慣用表現の導入—中 日の身体部位の慣用表現の比較を通じて

令和5年度

三重大学大学院地域イノベーション学研究科
博士前期課程地域イノベーション学専攻

ZHANG BAOQING

目次

第一章 序論	1
1.1 研究の目的と意義	1
1.2 研究方法	1
第二章 先行研究	3
2.1 慣用表現の定義と分類について	3
2.2 身体語彙の慣用表現について	6
2.3 認知言語学における先行研究	11
2.4 慣用表現と日本語教育	14
第三章 「足」を含む慣用表現の中日比較	16
3.1 中日における「足」に関する同形同義の慣用表現	17
3.2 中日における「足」に関する同形異義の慣用表現	18
3.3 中日における「足」に関する異形同義の慣用表現	19
3.4 本節のまとめ	19
第四章 中日における慣用表現の予備調査	22
4.1 アンケート調査	22
4.2 調査の結果及び分析	22
第五章 慣用表現の教育実践	31
5.1 授業の設計と実施	31

5.2 指導の具体的方法	34
5.3 実践の結果及び分析	37
5.4 本章のまとめ	46
第六章 結論	48
参考文献	49
付録	52
謝辞	57

A Study on Introducing Educational Method of Body Related Idiomatic Expressions for China's Japanese Language Learners

ZHANG BAOQING

September 2023

Summary

In order for Japanese learners to acquire natural Japanese, they must understand not only vocabulary and grammar, but also the meaning and usage of idiomatic expressions. However, idiomatic expressions are often not limited to literal meanings, and incorrect use can also hinder communication. Therefore, this is a learning project that education needs to consider.

In Liu and Yang (2018), the actual teaching situation of idiomatic expressions in China and recommendations for teaching methods are made, but no examples of their application to actual teaching effects can be found. Therefore, this study compares and analyzes idiomatic expressions with the word "foot" between China and Japan, and explores how to introduce idiomatic expressions teaching into Japanese language teaching for China's Japanese language learners.

First, idiomatic expressions containing "foot" will be selected from Chinese and Japanese dictionaries. Then, we focus on the "heteromorphic synonyms" and "isomorphic heteronyms", which are expected to be particularly difficult for Chinese Japanese learners to master, using different teaching methods and measuring the effectiveness of these methods. This study implemented three different instructional practices (the direct memorization method, the cognitive linguistic method, and the comparative method of Chinese-

Japanese idiomatic expressions) and conducted pre- and post-tests to measure their effectiveness.

Conclusions

The results showed that the Cognitive linguistics method was superior in improving learners' comprehension of idiomatic expressions. By comparing Chinese and Japanese idiomatic expressions, this study explores the methods of introducing idiomatic expression teaching into Japanese language education, and verifies the effectiveness of using Cognitive linguistics methods. This research has important theoretical and practical implications for the field of Japanese language education by enhancing learners' understanding and ability to apply idiomatic expressions and promoting the development of Japanese language education.

Acknowledgment

I would like to express my sincere gratitude to my thesis advisor, Dr. Matsuoka, and PM faculty members, Dr. Nishimura and Dr. Yagami, for their guidance in writing this thesis.

References

Liu, L. H. and Yang, Z. (2018) "An Investigation of Teaching Strategies of Japanese Idioms under the Guidance of Cognitive Theory-Taking the Idioms of 'ME' as an Example"

第一章 序論

中日両国は一衣帯水の隣国で共通する文化も多く、両国は古くから密接に交流してきた。両国で使用されている言語にも、多くの共通の現象が見られるといわれている。慣用表現はその共通の言語現象の一つであり、長い間、人々の日常生活の中で生まれた言語表現である（呂 2013）。日本語学習者が自然な日本語を習得するには、語彙や文法だけでなく、その背景になる文化等も理解する必要がある。慣用表現もその中の一つであり、意味や用法も理解しなければならないが、慣用表現は字面からでは意味が想像しにくいものも多く、コミュニケーションの妨げとなる可能性もある。このことから、慣用表現は教育に配慮が必要な学習項目のひとつである。

1.1 研究の目的と意義

本研究では、慣用表現を「単語の2つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉」（宮地 1982）¹と定義し、中国人日本語学習者に対する慣用表現の導入方法について検討する。慣用表現の種類には様々なものがあるが、人体器官や身体部位の語彙で構成された慣用表現がその大部分を占めていることは、このような慣用表現は主に人間の経験に由来し、日本人の日常生活や交流において、慣用表現は極めて重要で、不可欠であることを示している（沈 2009）。そこで、本研究では、人体器官や身体部位に着目して、中日の慣用表現を比較分析することとする。

また、本研究では、字義通りの理解では誤解を生じる可能性があるために、指導に配慮を必要とする慣用表現をいかにして導入するかについても検討する。これまでの中日慣用表現研究では、中日慣用表現の異同や認知言語学的な観点から見た慣用表現の比較研究が多く、慣用表現の教育については、具体的な実践やその効果について明らかにした研究がまだない。本研究は中日の慣用表現の研究を通じて、中国人日本語学習者に対する慣用表現導入方法の改善を促す。

1.2 研究方法

本研究では、中日の慣用表現を比較したうえで、教育内容を設計し、慣用表現を日本語教育に導入する三つの方法を試み、その効果を比較する。

¹宮地裕（1982）『慣用句の意味と方法』明治書院

まず、関連する文献などを調査し、中日の慣用表現の使用例や特徴について収集する。これにより、中日の文化や言語の背景を理解し、慣用表現の異同点を明らかにする。比較分析を行うことで、中日の慣用表現の共通点及び相違点を把握し、教育内容の設計を行う。

次に、アンケート調査によって、中国における日本語慣用表現の教育実態及び中国人日本語学習者の日本語レベルと慣用表現の理解度の相関関係を明らかにし、中国人日本語学習者における慣用表現に関する認識や困難点を明らかにする。

そして、慣用表現の導入方法を三つ選定し、学習者に対して指導を行う。指導方法は、具体的には（１）暗記法、（２）認知言語学的手法、（３）中日慣用表現の比較法の三つである。指導前後に学習者に対して試験や評価を行い、各指導方法の教育効果や学習者の理解度の変化を明らかにする。

最後に、収集したデータを分析し、統計的手法を用いて各指導方法の教育効果を評価する。教育効果の比較や学習者の理解度の変化に基づき、最も効果的な指導方法を選定する。

以上の研究方法により、中日の慣用表現の教育における指導方法の有効性や学習者の理解度向上について具体的な知見を得ることが期待される。

第二章 先行研究

2.1 慣用表現の定義及び分類

本節では、まず日本と中国における慣用表現の定義と分類を概観した上で、本論文で用いる慣用表現について定義する。

2.1.1 日本における慣用表現の定義及び分類

日本では 1930 年代に慣用表現の研究が始まったとされており、1940 年代以降、岡本などによって慣用表現の研究が進められた（于 2021）。後述するように、白石（1950）²は慣用表現の定義を行い、『国語慣用句大辞典』を執筆して慣用表現を体系的にまとめ、慣用、成句、慣用句の意味を詳細に述べた。また、宮地（1982）は、慣用表現の定義、分類、特徴、用法などを詳細に記述した。身体部位の慣用表現については、中村（1985）が分類を行い、その意味及び比喩性について考察した。以下では、白石（1950）、宮地（1982）、中村（1985）、及び国広（1985）の慣用表現の定義についてみていく。

白石（1950）は慣用表現について次のように定義している。「世間の通用のものではあるが、文法に合わない特殊な言語の意に用いられる。慣用は習慣の固定であり、文法的であるか否かに関せず、文法の定まったもの」。そして、慣用表現の語義から、慣用表現を次の四つに分類した。（1）語義は構成要素の意味だけでは理解できない。（2）語義は構成要素の意味で理解することができるが、構成要素の意味論は抽象的な意味を持っている。

（3）意味は構成要素の意味によって理解することはできず、構成要素の意味は語源から比喩したものであるため、両者は結合当初から意味を明確化していた。（4）語義は構成要素の派生の意味である。語義は、構成要素が表す動作の目的、理由、結果を暗示する。

また、宮地（1982）は慣用表現の定義を「慣用句という用語は、一般に広く使われているけれども、その概念がはっきりしているわけではない。ただ、単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉だという程度のところが、一般的な共通理解になっているだろう」としている。そして、慣用表現を分類し、次の図 1 のように示している。宮地は文を一般連語句と成句の二種類に分けているが、宮地によると、一般連語句とは意味の関係が許す限り二つ（二つ以上）の語を自由に組み合わせる文である。成文とは定型の形式を持つ二つ（二つ以上）の語からなる文の

² 白石大二（1950）『日本語のイディオム』三省堂

ことで、その結合の程度は一般連語句より高い。成句には、慣用句と格言とことわざがあるが、概して格言やことわざは歴史的・社会的に安定した価値観を持った成句である。慣用句には、連語成句慣用句と比喻慣用句がある。慣用句とは、二つ以上の語の結合に制約があり、使用が固定された上で、比喻慣用句のような語義的派生的な意味を持たない文を指す。比喻慣用句とは比喻的な意味を持つ慣用句のことで、直喩慣用句と隠喩慣用句がある。しかしこれらの慣用句は境界線が明確ではなく、決まり方によってばらつきがあるため、慣用句をすべて細かく見分けることは困難である。

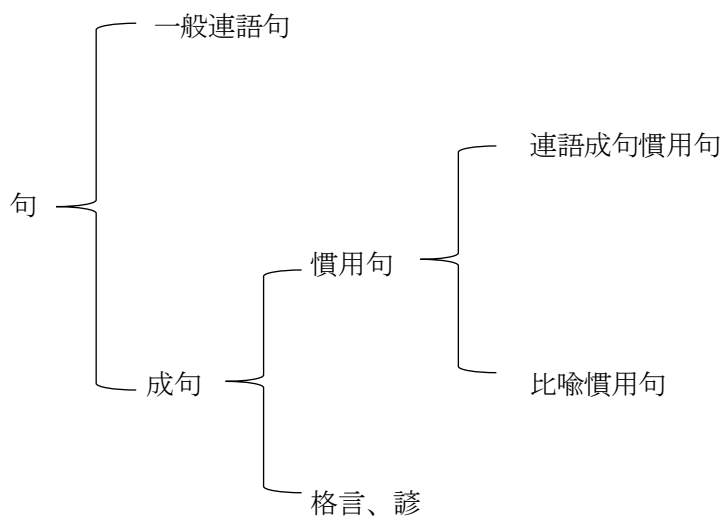


図1 慣用句の分類 (宮地 1982)

中村 (1985) は『慣用句と比喻表現』において、「二つ以上の語の結びつきが強く、その結合全体が構成要素の意味の単なる積み上げとして直線的にたどりにくい意味を慣用的に獲得した場合を典型とする。」と述べている³。

国広 (1985) は『慣用句論』において「二語 (以上) の連結使用が固定しており、全体の意味は構成語の意味の総和からは出でこないものである」⁴と説明する。

以上の先行研究を踏まえ、本研究では日本語の慣用表現を以下のようなものとして扱う。

- ① 構成上で、二つ以上の連語で、構成語の結びつきが強いもの
- ② 意味が全体で決まる
- ③ 比喻的用法がよく用いられる

³ 中村明 (1985) 「慣用句と比喻表現」 日本語学

⁴ 国広哲弥 (1985) 「慣用句論」 日本語学

2.1.2 中国における慣用表現の定義及び分類

中国では慣用表現、熟語、ことわざをすべて「俗語」と呼ぶ。1950年以降、慣用表現に関する研究が多くなった。馬（1961）は『諺語・歇後語・慣用句』において語彙の言語単位として説明している。胡（1962）が監修した『現代漢語』では、慣用表現を語彙の単位として正式に定義し、文章や著作の中で使われている。1980年代以後、中国では、慣用表現についての論文や著書が徐々に発表され始める。しかし、慣用表現の定義における具体的な性質や範囲などの方面においては、学术界で分岐が存在している。

馬・高（1982）は『慣用語』において、慣用表現と単語及び連語との区別、言葉の意味、慣用句の構成という三つの方面から慣用句の特徴をまとめた。また、馬・高は、慣用表現についての定義は「慣用語是一种定型詞組从意義到結構都是完整的，統一的，尤其是意義，是超出了各个組成部分单独的意思而整体化了了的，而這個整体化的意義，主要是通過比喻和引申這兩個手段實現的⁵。（慣用語とは、意味から構造まで完全で、統一された定型句であり、特に意味は、各構成部分の単独の意味を超えて全体化されたものであるが、この全体化の意味は、主に比喻と引用の二つの手段によって実現される。）」と述べている。さらに、陳（2001）は、慣用表現の定義について「慣用語是具有語義變異特征的一種定型短語，其功能相当于一個詞而呈現出的口語格調和修辭色彩⁶（慣用語は意味変化の特徴を持つ定型句であり、その機能は1つの語と同等であり、口語の感覚と比喻の意味を表す）」と述べている。

これらの定義を通じて、

の慣用表現は以下の特徴を持つことがわかる。

- ① 構造の上では、固定連語である
- ② 意味は全体である特定の意味を表す
- ③ 比喩的な意味が顕著で、口語性が強い

2.1.3 本論文における慣用表現の定義

以上の中日の慣用表現の定義と特徴を踏まえて、本論文では宮地（1982）の「単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉」という定義に沿って研究を行う。

⁵ 馬国凡・高歌東（1982）『慣用語』内蒙古人民出版社

⁶ 陳光磊（2001）『漢語詞法論』上海学林出版社

2.2 身体語彙の慣用表現について

本節はまず中日の身体語彙の慣用表現について概観した上で、中日両語における「足」の身体語彙の意味について確認する。なお、次章は「足」を用いた慣用表現を研究する原因を説明する。

2.2.1 日本における身体語彙の慣用表現

日本には多くの身体語彙の慣用表現の研究があり、日本語だけでなく、他の言語の身体語彙の慣用表現との対照研究も多く、吉田・文（1999）、林（2002）、吉田・文（2003）などがある。

その他、身体語彙慣用表現の研究は認知言語学の角度からも展開されており、有菌（2006）は「分解可能な慣用表現における身体部位詞の意味拡張」において身体部位語を構成要素とする分解可能性が高い日本語の慣用表現を対象に、意味、特徴及び拡張された意味を分析し、慣用表現以外の身体部位語（物体部分語）の使い方と比較することで、慣用表現に現れる身体部位語の意味を明らかにしている。また、有菌（2008）においては、身体部位語と慣用表現の意味の間の繋がりを分析することで、慣用表現自体がある程度共通のプロセスを経て成立していることを説明する。同時に認知言語学におけるメタファーとメトニミーの認知プロセスを用いることで、両者の関係は私たちの身体的経験に基づく意味の拡張であると述べている。さらに、有菌（2013）では、「目」、「耳」、「鼻」の慣用句を例として、身体部位の語彙が基本的な意味から派生的な意味に拡張する過程と関連性を明らかにしている。

その他、日本語と英語の「首」という言葉を対象に、認知言語学のメタファーやメトニミーの概念を使って首の比喩的な意味を分析することで、首に関する異なる慣用表現の意味を明らかにし、慣用表現の字面からその慣用表現の実際の意味にどのように拡張するかを探究しているものもある（森 2018）。

上述の先行研究により、日本における身体慣用表現の研究は、身体慣用表現の対照研究から、認知言語学的身体慣用表現の対照研究へと発展していることが分かる。また、認知言語学の角度から身体慣用表現を対照分析する場合、メタファーとメトニミーの概念を用いて意味拡張を行う内容も数多く存在する。

2.2.2 中国における身体語彙の慣用表現

中国における身体語彙の慣用表現の研究には、中日における身体語彙の慣用表現に関する対照研究が数多く、張（2009）及び王（2011）は日本語と中国語における身体語彙慣用表現について研究している。また、趙（2007）及び沈（2009）は中日における身体慣用表現を「中日で対応できる慣用表現」と「中日で対応できない慣用表現」に分けて対照分析している。そのほか、一部の中国における身体語彙の慣用表現の研究では、認知言語学の観点から中日の身体語彙の慣用表現について対照研究が行われている。曹（2012）及び于（2021）は認知の視点から身体語彙の基本義と派生義と慣用表現の関係を探知することを行った。陳（2012）、屈（2014）、翟（2016）等においては、認知言語学の比喩理論を用い、中国語と日本語における身体語彙を含む慣用表現について比較し、個々の慣用表現の意味生成の過程を解明した上で、両者の認知プロセス上それぞれの意味拡張を分析し、対照研究を行った。

上記の先行研究から、中国の身体語彙慣用表現の研究も主に中日両国の身体語彙慣用表現を認知言語学の角度から分析する対照研究を中心に展開していることが分かる。本論文では上記論文の中で認知言語学の角度から身体語彙の意味拡張の過程を参考にする。

また、以上の先行研究では、身体語彙の慣用表現は「目」「口」「頭」「顔」を中心に展開されており、「足」についての比較研究はまだ十分になされていない。また、足の慣用表現に関する既存の研究では、認知言語学の観点から慣用表現を分析するにとどまり、意味内容についての比較研究は行われていない。そこで、本研究では、まず次節で「足」を用いた慣用表現について、中日比較を行う。

2.2.3 中日における「足」の意味及び意味拡張

本節では、日本語と中国語の「足」の意味を概観し、そして認知言語学のメタファーとメトニミーの視点から「足」の基本義と派生義を確認する。

2.2.3.1 日本語と中国語における「足」の意味

『広辞苑』⁷では、足について以下のように記されている。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 動物の下肢体の部分。② 胴から下に分かれ出て、からだを支え、また歩くのに使う部分。③ 特に人間の足首から下の部分。 |
|---|

⁷ 新村出（1955）『広辞苑』岩波書店

- ④ 形、位置などが、動物の足に似ているもの。
- ⑤ 物の下部にあり支えの用をするもの。
- ⑥ 二つ分かれ出たもの。
- ⑦ 漢字の下部をなす構成部分。
- ⑧ 雨の降り落ちる形を見立てた言い方。
- ⑨ 本体の、末と認められる部分。
- ⑩ のびて切れない餅のねばり。
- ⑪ 直線または平面に、ある点から下ろした垂線がその直線または平面と変わる点。
- ⑫ 動物の足のように、移動に使う、または移動するもの。また、その移動。
- ⑬ 歩み。
- ⑭ 逃げ歩いた道筋。足どり。
- ⑮ 物の移行。また、その跡。
- ⑯ 足のようによく動くからいう流通のための金銭。

中国における「足」の慣用表現では通常「脚」の字を用いて表現されており『漢語大辞典』⁸で「足」は以下のように記されている。なお、() 内は筆者による訳を表す。

- ① 脚。(足)
- ② 代指整个身体。(身体)
- ③ 支撑器物的脚。(器物を支える部分)
- ④ 充实, 完備, 足够。(充实、完備、豊か)
- ⑤ 指足球。(サッカー)
- ⑥ 多。(多い)
- ⑦ 够得上某种程度和数量。(ある程度或は数を達する)
- ⑧ 満足, 知足。(満足する)
- ⑨ 身体素質好。(体質がいい)
- ⑩ 完全。(完全)
- ⑪ 值得 (値する)

2.2.3.2 日本語と中国語における「足」の意味拡張

「各カテゴリーの事例にはそれぞれ代表的な概念があり、プロトタイプと呼ばれる。カテゴリー化とは、人間が日常生活の中で感じたり経験したりするものをグループにまとめる認識プロセスを指す。人間は類似性や一般性を抽出することで、ものごとを認識し、分類する。「A といえば B だ」という表現において、A に当たるのがカテゴリーで、B に当たるのがプロトタイプである。カテゴリーとメンバーの関係は、単語と語彙の関係と同列に理解することができる。」(範 2018) ⁹。そのため、「足」にもプロトタイプやカテゴリーがあると言える。「足」と言えば、まず頭に浮かぶのが「人間の足首から下の部分」である。すなわち、「足」のプロトタイプは「人間の足首から下の部分」である。

⁸ 羅竹風 (1986) 『漢語大辞典』漢語大詞典出版社

⁹ 範馨馨 (2018) 「从認知言語学的的角度分析中日以『口』為中心的慣用語的意義」

これが足の基本義だが、于（2021）は「足を含む日中慣用句の対照研究」の中で類似性に基づくメタファー作用の意味拡張について、「足は体の一部であり、体の一番下にあり、体全体の基礎となることから、基礎や立場という意味に派生する。そして足が支えたり歩いたりする役割を果たすようになったことから、交通手段を意味するようになった。人間が歩いているうちに跡が残ることから、足跡という意味に派生する。」と述べた。また、隣接性に基づくメトニミー作用の意味拡張について、「人はどこに行っても比喻として足を使って移動するので、足の基本義から移動の意味を派生させることができる。また、足は身体の一部だから、派生して身体という意味にもなる。また、物の隣接性から派生する弱点、金銭、関係などの意味もある。」¹⁰と述べた。

そこで日本語における「足」の意味をメタファーとメトニミーでまとめて次の表1のようにする。

表1 日本語の「足」の意味（于 2021）

足の基本義	人間の足首から下の部分である。
足の派生義 (メタファー)	物の下で支える部分 からだを支えたり歩行に使ったりする部分。 歩み 足跡 交通手段 基礎、立場
足の派生義 (メトニミー)	移動 身体 弱点 流通のための金銭 関係 餅などの粘り 足蹴

「足」の基本的な意味は「足」で、人や動物の体の最下、地面と接し、支えている部分のことで、通常歩行に用いられる。これ以外にも、様々な派生的な意味がある。

于（2021）は「足を含む日中慣用句の対照研究」の中で類似性に基づくメタファー作用の意味拡張について「人や動物は歩くときに足跡を残すので、そこから派生して足跡の意味が生まれる。そして、器物の下部に支えるためのものがある。生活には人や動物の足のようなものも多いのだが、椅子やテーブル、椅子などの下部に足のような支えの部分があ

¹⁰ 于鑫（2021）「足を含む日中慣用句の対照研究」

り、人や動物の足に似ていることから、メタファーに基づく概念理解では足に例えられる。また、足が支えたり歩いたりする役割を果たすことから交通手段という意味にも派生する。それから、足には十分、時間が充実しているという意味もあり、量の概念はメタファー的な理解に基づいている。それに、足は値する意味を派生させることもでき、抽象的なメタファーと捉えることができる。」と述べている。

また、隣接性に基づくメトニミー作用の意味拡張から分析すると、「足は身体の一部であり、足と身体に関連性によって、足は身体の意味を派生させることができ、部分から全体へのメトニミーに基づいている。また充足な意味を派生させることができ、充足は内心からの知覚であり、部分から全体へのメトニミーに基づいている。「足」には「ある程度手が届く」という意味もあるが、ある程度手が届くように、部分から全体の上で、他の人と肩を並べることができる。物事の隣接性から派生して弱点、関係などの意味もある。」と述べた。

そこで、中国語における「足」の意味をメタファーとメトニミーを表2のようにまとめる。

表2 中国語の「足」の意味（于 2021）

足の基本義	人間の足首から下の部分
足の派生義 (メタファー)	物の下で支える部分 からだを支えたり歩行に使ったりする部分 歩み 足跡 交通手段 基礎、立場 量の概念 値する
足の派生義 (メトニミー)	移動 身体 弱点 関係 足蹴

以上、日本語と中国語における「足」の意味及び意味拡張について確認した。于 (2021) は「足を含む日中慣用句の対照研究」において中日における「足」の意味の共通点と相違点をまとめた。日本語と中国語の足の意味の比較は図2のように、重なっていない部分の中に、日本語の部分の「餅などの粘り」という意味の慣用表現がある。これは「足が強い」によって表される。また、「流動のためのお金」という意味の慣用表現もあ

る。これは、「足が出る」によって表される。中国語においては、「量の意味」の慣用表現があり、これは「湊一脚（数を満たす）」という。

これらの慣用表現は、それぞれ形も意味もまったく異なるものだが、次の第三章では、図2の重なり合う部分の意味の慣用表現を「対応できるもの」と「対応できないもの」二つのタイプに分けて分析する。

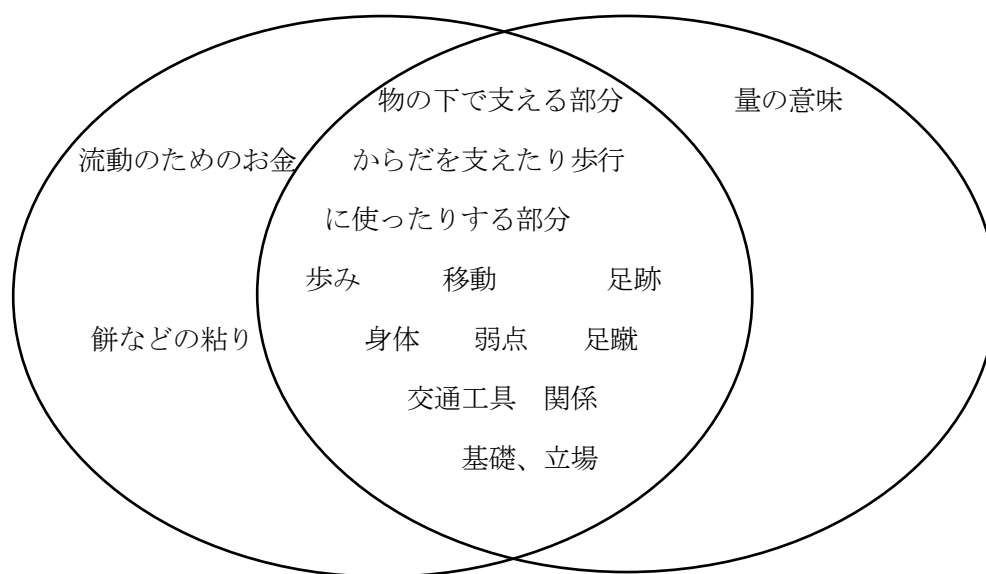


図2 日本語と中国語における「足」の意味の比較（于 2021）

以上、近年の身体語彙の慣用表現の研究成果を整理した。一部は中日の身体語彙の慣用表現の比較研究である。またいくつかは認知言語学の角度からの身体語彙の慣用表現の研究である。認知言語学の理論を使って慣用表現を分析した多くの研究では、認知言語の理論に基づいて、メタファーとメトニミーを使って身体語彙の意味拡張を分析し、対照している。そしてこの身体語彙を含んだ慣用表現の意味生成の過程、作用を考察している。そこで本論文では、上記先行研究の「足」の意味拡張の内容をもとに、中日における「足」の慣用表現について「対応できるもの」と「対応できないもの」を対照分析する。

2.3 認知言語学における先行研究

本節では、認知言語学における関連概念についての先行研究をまとめて、プロトタイプ、イメージスキーマ及びメタファーとメトニミーの概念を確認する。

2.3.1 プロトタイプ

山梨（1995）によると、プロトタイプは人間が外界のものを共通性のあるカテゴリーとして認識するための基礎であり、そのカテゴリーの中心的なメンバーであるという。私たちは世界を説明するとき、最も認知されやすい事例に注目し、それをもとに分類を進める。これは外の世界の一般的な解釈だけでなく、言語現象の解釈にも当てはまる。一般的に、特定のカテゴリーに関する事例には、そのカテゴリーに属するという保証はない。ある事例の中で、特定の事例が焦点化され、その代表メンバーとして中心に位置づけられたものがプロトタイプである¹¹。

2.3.2 イメージ・スキーマ

山梨（1995）はイメージとは具体的な経験に基づいて形成された心的表象であり、イメージによって私たちは対象を理解するだけでなく、具体的なイメージによって拡張され、より抽象的な対象を理解することができて、イメージは世界の認識を支えると述べている。また、私たちは外部の対象についての具体的なイメージを形成するだけでなく、イメージに関する具体的な知識に基づいて様々なイメージスキーマを構築することができると述べる。

Lakoff & Johnson（1980）は「イメージスキーマは、具体的な経験に基づいて抽象化され、構造化された認知的なフレームの一種であり、日常言語の意味の拡張や創造的な側面と密接に関わっている」と述べる。そして、言語学の分野で〈容器〉のスキーマ、〈上下〉のスキーマ、〈前、後〉のスキーマ、〈部分、全体〉のスキーマ、〈中心、周辺〉のスキーマなどの典型的な例として提案している¹²。

辻（2002）は、「スキーマとは、経験を抽象化し、構造化して得られる知識の形態であり、対象の理解を促進する役割を果たす」と述べた。従って、イメージスキーマとは、様々な身体的な経験に基づいて形成されたイメージを、より高次の抽象化や構造化を行い、拡張を促す規範となる知識形態を指す¹³。

山梨（1995）は容器イメージスキーマについて「日常生活の中では様々な行動があり、それによって具体的なイメージが形成される。例えば、物を取り出すという行為も、日常

¹¹ 山梨正明（1995）「認知文法論」ひつじ書房

¹² Lakoff, George, and Mark Johnson. "The Metaphorical Structure of the Human Conceptual System." *Cognitive Science*. vol. 4, no. 2, Apr. 1980

¹³ 辻 幸夫（2002）「認知言語学キーワード事典」研究社

生活の基本的な経験である。このような経験により、空間の一部は境界がある領域として認識される。その経験をもとに、容器イメージスキーマが作られる。このスキーマは、認知フレームワークの一種で、周りの世界の一部を容器として、外の空間に限定して理解することで、このイメージスキーマを拡張することで、物理的な世界だけでなく、より抽象的な世界を述べるができるようになる。このイメージスキーマは、日常言語においても重要な役割を果たしている」と述べた。

2.3.3 メタファーとメトニミー

認知言語学における意味拡張のプロセスとして、通常メタファー、メトニミー、シネクドキーという3種の比喩を取り上げる。認知言語学では、言葉の多義性の派生過程では、メタファーとメトニミーという概念が重要な役割を果たしていると考えられる。

榎山（2001）によると、メタファーとは二つの事物、概念のある類似性に基づいて、一方の事物、概念を表す形式を用いて、他方の事物、概念を表すという比喩である。このとき、分かりやすい対象物が存在する領域を「起点領域」といい、把握しにくい抽象概念の存在場所を「目標領域」という。主に数量、時間、順序、属性、状態及び評価六つの目標領域に写像されることができる。そして、属性は物理的属性と社会文化属性に分けることができる。状態は生理的状态と心理的状态と事件的状态に分けることができる。メトニミーとは、二つの事物の外界における隣接性やより広い二つの事物、概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一つの事物、概念を表す形式を用いて、もう一つの事物、概念を表すという比喩である。伝統的に「隣接性に基づく比喩」と定義されてきた。すなわち、メトニミーはあるものを近くにある他のものに置き換えて表現することである。その隣接性は「部分と全体」や「容器と内容」、「生産者と生産物」、「場所と出来事」などの隣接関係で表される¹⁴。

本論文は以上の認知言語学におけるプロトタイプとカテゴリーの概念及びメタファーとメトニミーの観点に基づいて、中日の慣用表現を分析する。そして、認知言語学を使った分析手法を日本語の慣用表現の指導効果に応用した研究は行われていないため、本論文は範（2018）に倣い、認知言語学の容器イメージスキーマを用いることで、日本語教育に慣用表現を導入する。

¹⁴ 榎山洋介（2001）「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」認知言語学論考

2.4 慣用表現と日本語教育

本節では、日本語教育における慣用表現の教育についての必要性及びこれまでの慣用表現の教育策略をまとめる。

2.4.1 慣用表現の教育の必要性

鄧（2012）は「日本語教育における基本慣用句選考の試み」において、慣用表現の作用について「慣用句の効用とは、会話や文章に彩りや潤いを与え、新しい生き生きとした命を吹き込むことである。慣用句が含まれない会話や文章は確かに意味伝達的に無難であるが、喩えてみれば、まったく調味料を使わない料理のようなものでもあり、慣用句の一調味料を加減よく入れた料理と比べると、その味が一段と落ちるであろう。したがって、よく学習や指導によって、日本語慣用句を身に付けたら、日本語そのものをよりよく理解できるし、日本の文化や風習をいっそう理解が行くことに違いない。また適切に使うことができれば、表現が豊かになり、生き生きしていくわけであろう。」¹⁵と述べている。また、鄧は中国の日本語教育において、大学日本語専攻基礎段階教育要綱と高学年段階教育要綱、大学日本語専攻四級試験要綱と八級試験要綱に慣用表現についての考察が求められているが、規定が混乱しており、明確な教育方針がないことを明らかにした。そのことから、慣用表現を日本語教育にいかに導入するかについて、探る必要があることが分かる。

2.4.2 慣用表現の教育策略

劉（2013）は日本語慣用句教学の策略について、「まず全体のレベルから日本語の慣用表現について解説する。内容は慣用表現の構成形式、語彙の特徴、使用方法及び語用機能などである。学習者がしっかりと認識することで、慣用表現をやみくもに学ぶのではなく、より体系的に慣用表現を学ぶことができるようになる。」と述べた。また、朱・葛（2013）は「認知言語学の日本語慣用語教育における応用」の中で認知言語学、と日本語教育及び日本語慣用語教育における応用について検討した。そして、「認知言語学の発展に伴い、ますます多くの人が外国語教育の中で認知言語学を運用し始め、日本語教育も同様である」と述べた。日本語の慣用表現の意味は比喩的なものが多いので、授業では認知言語学の原型理論やメタファー理論などを用いて慣用表現の語義を説明することができる。学習者が

¹⁵鄧娟娟（2012）「日本語教育における基本慣用句選考の試み—現代日本語書き言葉均衡コーパスと精読教科書・能力試験問題における出現頻度調査に基づいて—」

慣用句を認知的に理解・記憶できるようになると同時に、学習者が暗記してしまうような悪い学習からの脱却を促すことにもなる。劉・楊（2018）は認知言語学が日本語の慣用句指導においていかに応用できるかについて論じた。「目」を用いた慣用表現を例にとると、まず、教える時にその語義を認知の角度から分類することができて、学習者に逐一記憶させるのではなく系統的に把握させることができる。次に、学習者が自らその意味拡張メカニズムを発見するように誘導することで、学習者が一を聞いて十を知る能力を高め、他の慣用表現の学習を助けることができる。そして、学習者の日本語慣用表現の学習意欲を高めるとのことである¹⁶。

以上の先行研究では、日本語の慣用表現教育の必要性や、慣用表現の教育策略について言及している。また、慣用表現の教育に認知言語学の理論を用いた教育方法も存在するが、実際の慣用表現を教える試みは行われていない。そこで、本研究では、身体語彙「足」を主要な研究対象として、認知言語学の角度から分析し、それに基づいて、適切な慣用表現の教育方法を探求し、先行研究では行われてこなかった教育の試みを実際に行い、日本語教育にどのように慣用表現の教育を導入すべきかを探る。

¹⁶ 劉立華・楊紫（2018）「認知理論指導下の日本慣用語的教学策略探究—以『目』類慣用語為例」

第三章 「足」を含む慣用表現の中日比較

前章で述べたように、「足」に関する慣用表現についての中日比較分析はまだ十分に行われていないことから、また中日における「対応できる慣用表現」と「対応できない慣用表現」についての研究が数少ない。そこで、本章では第二章の図2を参考に、中日における「足」の意味の比較から、「足」を含む中日の慣用表現を分析する。まず、中日における「足」を含む慣用表現を収集した。日本語は『日本語慣用句辞典』¹⁷、『実用ことわざ慣用語辞典』¹⁸、『国語慣用句大辞典』¹⁹から55例の慣用表現を収集した。中国語は、日本語の「足」に対応する「足」、「脚」、「腿」の慣用表現を『中国慣用語大全』²⁰、『漢語熟語辞典書系：漢語慣用語辞典』²¹、『中国慣用語大辞典』²²から69例の慣用表現を収集した。その結果を表3、表4に示す。これらの中日慣用表現を、中日の足の意味によって、「形も意味も似ている慣用表現（同形同義）」、「意味は似ているが、形が違う慣用表現（異形同義）」、「形は似ているが、意味が違う慣用表現（同形異義）」に分けた。

次に、第二章で述べたとおり、図2の重なり合う部分、つまり「物の下で支える部分からだを支えたり歩行に使ったりする部分」、「歩み」、「移動」、「足跡」、「身体」、「弱点」、「足蹴」、「交通工具」、「関係」「基礎、立場」という意味の慣用表現を、同形同義、同形異義、異形同義の三つに分類し、比較、分析する。

表3 日本語における足を含む慣用表現

足がある	足踏みをする	足を揺り粉木にする
足が重い	足下から島が立つ	足を抜く
足が地につかない	足下に付け込む	足を向ける
足が付く	足下に火がつく	足を踏み入れる
足が出る	足下にも及ばない	足を痛める
足が遠のく	足下の明るいうち	足を食われる
足が早い	足下へも寄り付けない	足を空に
足が棒になる／足を棒にする	足下を見る	足駄をはく
足が乱れる	足を洗う	足を伸ばす
足が向く	足を入れる	無駄足を踏む
足蹴にする	足を奪われる	足元から島が立つ
足留めを食う	足を掬う	足手纏い

¹⁷ 米川 明彦、大谷 伊都子（2005）『日本語慣用句辞典』東京堂

¹⁸ 三省学編修所（1987）『実用ことわざ慣用語辞典』三省堂

¹⁹ 白石大二（1977）『国語慣用句大辞典』東京堂

²⁰ 温端政（2004）『中国慣用語大全』上海辞書出版社

²¹ 李茂、陳光磊（2004）『漢語熟語辞典書系：漢語慣用語辞典』

²² 温端政（2011）『中国慣用語大辞典』上海辞書出版社

足並みが揃う	足を運ぶ	足をつける
足に任せる	足を引っ張る	揚げ足を取る
足場を固める	足に向けて寝られない	空足を踏む
足を出す	後足で砂をかける	浮き足立つ
足を取られる	驢足を展ばす	千里の行を足下より始まる
足を延ばす	二の足を踏む	足が奪われる
浮き足立つ	二足の草鞋	足で書く

表 4 中国語における足を含む慣用表現

脚板气	脚底板有千斤重	临上轿时缠脚
脚边路	脚不沾地	当垫脚石
脚不点地/脚不沾地	深一脚，浅一脚	站稳脚跟
脚步钱	捧臭脚	头是头，脚是脚
脚踩两条船/脚踏两只船	临时抱佛脚/抱佛脚	头上生疮，脚上流脓
脚底暗使绊儿	搬起石头砸自己的脚	头齐脚不齐
脚底儿抹油	头痛医头，脚痛医脚	头痛医头，脚痛医脚
脚底下没线	一步一个脚印	头重脚轻
脚跟脚	木匠屋里三脚凳	头三脚难踢
脚后跟	赤脚撵兔，穿鞋吃肉	听壁脚
脚后跟打后脑勺	踩在脚板心/踩在脚底下	铁脚板
脚碰脚	拆墙脚/挖墙脚	踏脚板/踏脚凳
脚俏皮	拆壁脚	小脚女人
脚梢天	躲头不躲脚/顾头不顾脚	捎带脚
脚踢油瓶不扶	插一脚	敲打钻脚
脚丫子朝天	穿鞋的不知光脚的苦	压住阵脚
脚站在锅边上	打缩脚	慌手慌脚/慌了手脚
脚正不怕鞋	独脚腿	站得住脚/站不住脚/站稳脚跟
脚不着地	前后脚	没脚螃蟹
脚蹬天，头顶地	没入脚处	没脚后跟
泥足巨人	足帮手，手帮足	学而后知不足
扯后腿/拉后腿	跑腿儿/白跑腿儿	拔出腿来
两条腿走路	鬼扯腿	火燎腿

3.1 中日における「足」に関する同形同義の慣用表現

第二章でみた足の基本義と派生義を基に、中日における同形同義の慣用表現をまとめ、表 5 に記す。

表 5 同形同義の慣用表現

意味分類	日本語の慣用表現	中国語の慣用表現
------	----------	----------

本当の足	足が重い	脚底板有千斤重
	足がすくむ	打縮脚
移動	無駄足を踏む	白跑腿
	足を引っ張る	絆住脚 扯后腿 拖后腿
弱点	揚げ足を取る	拿后脚
	足がつく 足が出る	露馬脚
	足を掬う	脚底下使絆子
基礎、立場	足場を固める	站住脚
関係	足を抜く	拔出腿来 抽腿儿
	足を踏み入れる	拔不出脚
	足を入れる	插一脚
足蹴	足蹴にする	踩在脚下
身体	足元にも及ばない	赶不上脚后跟
	小指にも足りない	比他的脚趾头儿也比不的

上記の「足」を含む慣用表現「無駄足を踏む」と「白跑腿」を例にとると、どちらも「わざわざ出かけるが、目的を果たせない」という意味である。この部分の「足」は中日両言語において「移動する」という意味であり、「無駄」及び「白」は「役に立たないこと」を意味する。

3.2 中日における「足」に関する同形異義の慣用表現

第二章でみた足の基本義と派生義を基に、中日における同形異義の慣用表現を以下の表6にまとめる。

表6 同形異義の慣用表現

	中日の慣用表現	意味
1	足を踏み入れる	入り込む。また、新たに関係するようになる
	插一脚	何かに関与したり他人のことに干渉したりすることの例え
2	足を空に	慌てふためく様子を形容する表現
	脚不着地	とても忙しい様子を形容する表現
3	足を運ぶ	あることのために、わざわざ出向く
	跑腿儿	人のために奔走して雑用をする

4	足が地に着かない	緊張や興奮のため心が落ち着かない
	脚不沾地	早く歩くことを表す
5	足下に火が付く	危険が身边に迫っていることをいう
	火燎腿	慌ただしく歩く様子を表す

「足を空に」と「脚不着地」を例にとると、両方とも「足が地に着かない」という状態を描写しているが、実際に表す意味は全く異なる。「足を空に」は慌てふためく様子を表す。一方、「脚不着地」はとても忙しい様子を表す。前者は慌ただしい心理を表すのに対し、後者は忙しい状態を表しており、両者の意味は全く異なる。

3.3 中日における「足」に関する異形同義の慣用表現

第二章における足の基本義と派生義を基に、中日における異形同義の慣用表現をまとめると、表7のようになる。

表7 異形同義の慣用表現

意味分類	日本語の慣用表現	中国語の慣用表現
実際の「足」	足が地に着かない	悬空八只脚
	浮き足立つ	慌手慌脚／慌了手脚
	二の足を踏む	一脚门里, 一脚门外
「スピード」	足が早い	脚底儿抹油
「関係」	二足の草鞋を履く	脚踩两只船

上記の例「二の足を踏む」と「一脚门里, 一脚门外」は、どちらも「一步目は進みながら、二歩目はためらって足踏みする。思い切れずに迷う。」という意味において共通しているが、表現は少し異なる。前者は両足の状態を描き、後者は片方の足が門の中にあり、もう片方の足が門の外にあるということから、思いきれずに迷っている状態を描く。

3.4 本節のまとめ

同形同義、同形異義、異形同義の慣用表現をまとめ、中日の慣用表現における共通点と相違点について分析する。まず、認知言語学において「語義の形成は人の認知と外部世界の主客性との相互作用に由来し、言語の本質にはメタファー的なものがある」としている。また山梨は、「言語に対する認識と概念の領域の拡張という部分で、私たちが日常の言語

を通して、外の世界の具体的な対象を理解するだけでなく、直接には身につけられない抽象的な世界に関する知識を柔軟に理解することができる。このような柔軟な理解を可能にする能力では、ある対象と別の対象との類似性を把握する能力と、時空的に近接関係または隣接関係にある対象を関連付ける能力が、特に日常世界を理解する上で重要な役割を果たす。この能力は、日常の言葉の伝達に間接的に反映されている」と述べている。つまり、人間は外の世界のものを認識することによって、様々な経験を積み、いくつかの経験基盤を築いている。そして、その経験に基づいて物事や抽象的なものを理解する。人間は日々の生活の中で、異なるものに類似性があるかどうかを経験的に知っている。慣用表現とは、私たちの日常生活の経験に基づいて作られた定型的な言葉のことである。したがって、中日の同形同義の慣用表現は、人々が日常生活の中に登場するものを同じように認識しているため、似たような用法の慣用表現が登場する。

また、上述した足の中日の慣用表現を比較すると、中国語と日本語では足の基本的な意味は「動物の、胴体から分かれ、からだを支えたり歩行に使ったりする部分」を指すことから、似たような派生的な用法が多く、慣用表現でも似たような用法が多いことがわかる。つまり、語源が近いため、拡張された表現にも類似点が多い。さらに深く考えてみると、中国語でも日本語でも漢字が使われているが、漢字は漢族文化の核心であり、表現形式として東アジア全域に影響を与えている。日本語も漢字の影響を受け、唐の時代に漢字と漢文化が日本に普及したため、中国と日本は同じ漢字文化圏に属している。そして、漢字を共有し、文化的な交流も多かったため（周 2021）²³、中日の慣用表現には多くの類似点と共通点がある。しかし、中日の文化背景の微妙な違いから、慣用表現には異なる点も存在する。たとえば、「足は洗う」と「洗手不干」は、新しい生活を始めたり、過去の過ちと決別したりするという意味だが、形式的には違う。足を洗うは、仏教から出た言葉である。裸足で修行をした僧は寺に帰り、泥足を洗うことで俗界の煩悩を洗い清めて仏業に入ったことから転じ、悪い行いをやめて正業につくことを意味するようになった。現代ではその意味が更に転じて、悪業・正業に関係なく、それまでの職業を辞める意味でも使われるようになって²⁴。同じ意味の中国語は「手を洗う」ことで「二度と悪いことをしない」ということを表している。中国では、悪いことをすると手が不潔になるため、手を洗うということは、悪いことをしなくなるということの意味する。また、日本語と同様に「それ

²³周凡琪（2021）「漢字在日本的傳播和日本文字的發展」

²⁴語源由来辞書 <https://gogen-yurai.jp/ashiwoaraau>

までの職業を辞める」という意味もある。

また、中国語慣用表現と日本語慣用表現は表現形式に違いがある。例えば、「悬空八只脚」と「足が地に着かない」の意味は類似しており、「緊張や興奮のため心が落ち着かない」ということだが、見せ方が全く異なる。日本語では慣用表現の意味をそのまま表しているが、中国語では慣用表現は、「飞机上吊螃蟹-悬空八只脚（飛行機からカニがぶら下がっている。すなわち宙に八本の足がぶらさがっている）」という俗語に由来しており、かなり誇張した表現を使って比喻している。先の例の「一脚門里、一脚門外」と「二の足を踏む」も同じ意味だが、中国語では慣用表現全体の対称性を追求するため、別々に表現している。他の慣用表現でも、中国語はこの対称性を追求することを好んでいる。例えば、「一脚高，一脚低」、「頭痛医頭，脚痛医脚」などである。

中日の慣用表現に同形同義の慣用表現が現れる主な理由は、人類が共通の認識を持っているからであり、中国も日本も漢字を使っている。しかし、両国には異なる言語表現が存在しており、異なる文化背景があるため、同形異義と異形同義の慣用表現が存在する。以上から、慣用表現を日本語教育にどのように導入していくかをさらに探求する必要がある。

第四章 中日における慣用表現の予備調査

本章では、中国における慣用表現教育の実態把握及び日本語能力と慣用表現の理解度の相関関係を測るために、予備調査を実施する。

4.1 アンケート調査

本節では、まず、中国人学習者の日本語慣用表現の教育実態と理解度を全面的に理解するため、アンケート調査を用いて予備調査を行う。調査の目的は中国人日本語学習者における慣用表現の教育現状を把握し、慣用表現の理解度を確認することである。

4.1.1 アンケート調査の作成

慣用表現のデータは、日本の『日本語慣用句辞典』、『実用ことわざ慣用語辞典』、『国語慣用句大辞典』、中国の『中国慣用語大全』、『漢語熟語辞典書系：漢語慣用語辞典』、『中国慣用語大辞典』から収集した。集められた慣用表現は、意味と形式の面から（１）同形同義（２）同形異義（３）異形同義に分類した。そしてそれぞれから合計 20 個の慣用表現を選択、テストを作成し、中国人日本語学習者に理解度を測る調査を行うことにした。その後、アンケート調査の結果から、中国人日本語学習者における慣用表現の困難点を特定し、どのような指導法が可能かを考える。

4.1.2 調査対象

調査対象は日本語学習歴が３年以上の中国人日本語学習者 30 名であり、慣用表現についての学習経験を持つ者である。予備調査では主に中国人学習者に対する慣用表現の教育実態と慣用表現全般の理解度を測る。この調査によって、どのような慣用表現が中国人日本語学習者にとって難しいかを明らかにした上で第五章でより詳しく見ていく。そのため、予備調査中の調査対象は第五章における教育実践に参加する調査対象とは異なる。

4.2 調査の結果及び分析

4.2.1 慣用表現の教育状況

質問 1 は「慣用表現はどこでよく目にしますか」である。結果を以下の図 3 に示す。

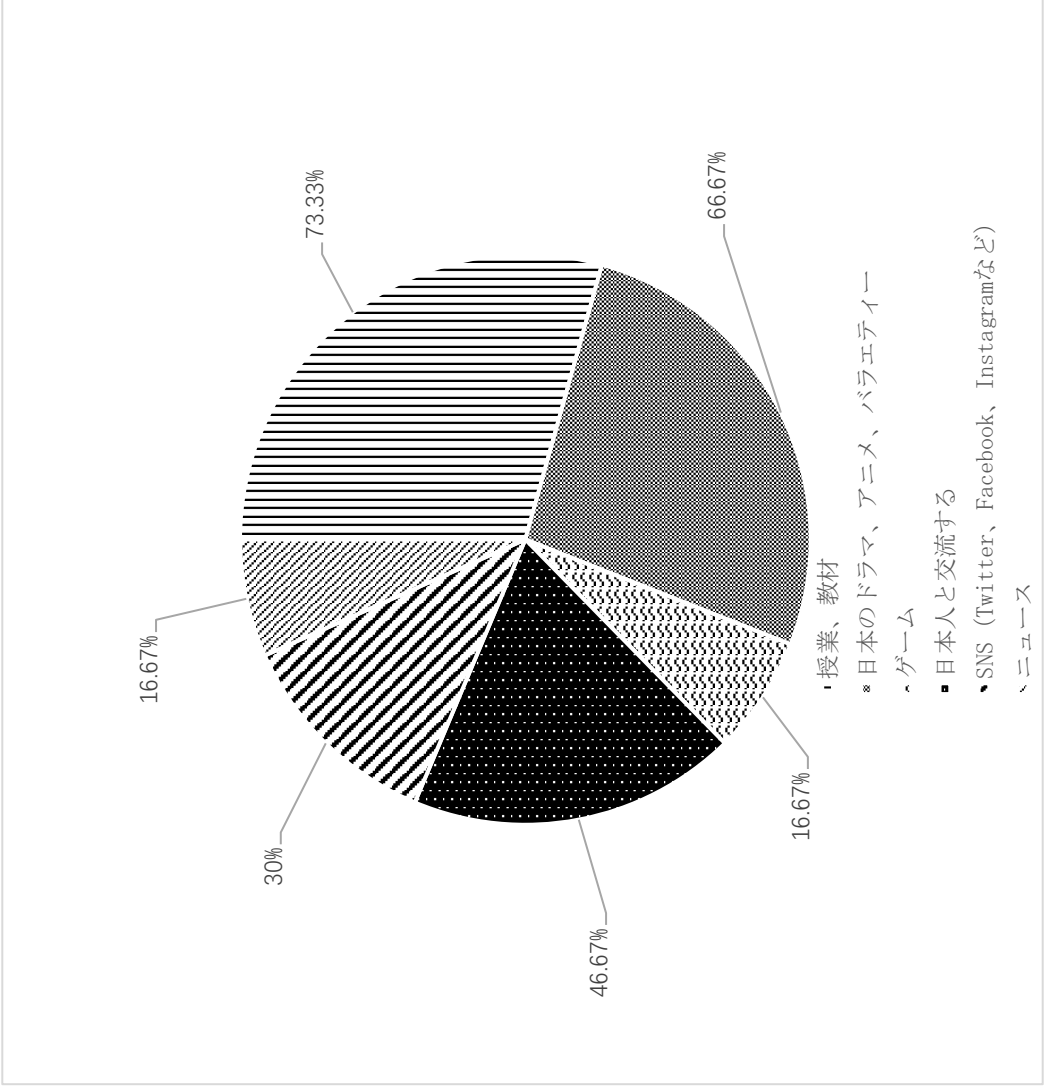


図3 質問1「慣用表現はどこでよく目にしますか」の回答

図3を見ると、7割以上の学習者が授業や教材で知ったと答えた。次に、日本のテレビ番組、日本人との交流で慣用表現を知ったと答えた人がいた。つまり、大半の学習者が授業や教科書を通じて知っていることが明らかになった。次に、質問2では日本語の学習や使用でどのくらいの頻度で慣用表現に触れるかについて問うた。結果は以下の図4の示すとおりである。

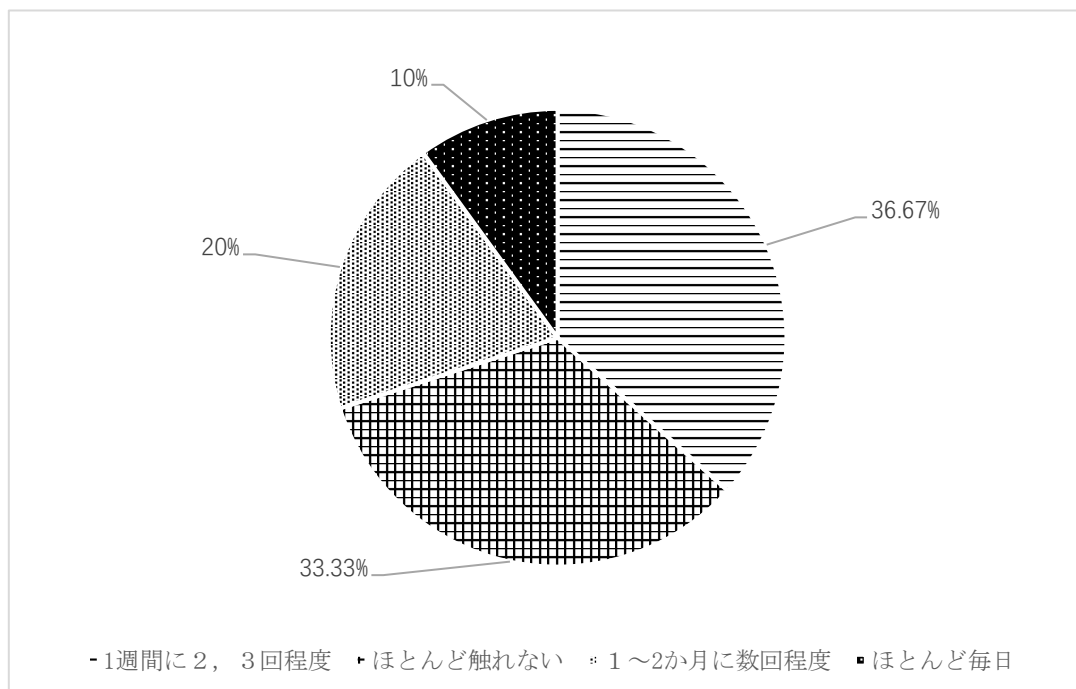


図4 質問2「日本語の学習や使用でどのぐらいの頻度で慣用表現に触れますか」の回答

図4の示す通り、3割の学習者が週に2、3回と答えており、1割の学習者だけが毎日慣用表現を学習・使用していると答えた。学習者が慣用表現を学んだり使ったりする頻度はそれほど高いことがわかる。

質問3は「日本語学習中に授業で慣用表現を学ぶ機会はあるか」という質問で、以下の図5から7割の学習者が普段の授業でのみ慣用表現が現れることが分かった。そして慣用表現を専門的に学ぶコースを選んだ学習者は2割にとどまった。普段の授業で慣用表現を学んでいる学習者が、慣用表現を専門的に説明する授業がない場合、教師が慣用表現を説明するかどうかを尋ねたところ、図6から7割の学習者が「説明する」と答えた。慣用表現の説明については、図7から5割の学習者が、教師は慣用表現の意味だけを説明すると答えた。教学状況の調査では慣用表現を専門に授業とすることは少ないことが分かるが、普段の授業で慣用表現が現れると、ほとんどの教師が説明するが、説明しても慣用表現の意味だけを説明するにとどまり、慣用表現の中で文化を説明したり、慣用表現とどのように記憶したり、中日慣用表現とどのような違いがあるかを説明したりすることは少ないとのことである。そのため、日本語教育では慣用表現を教えることはあっても、実際に教える程度は低く、詳しく説明することは少ないことが分かった。

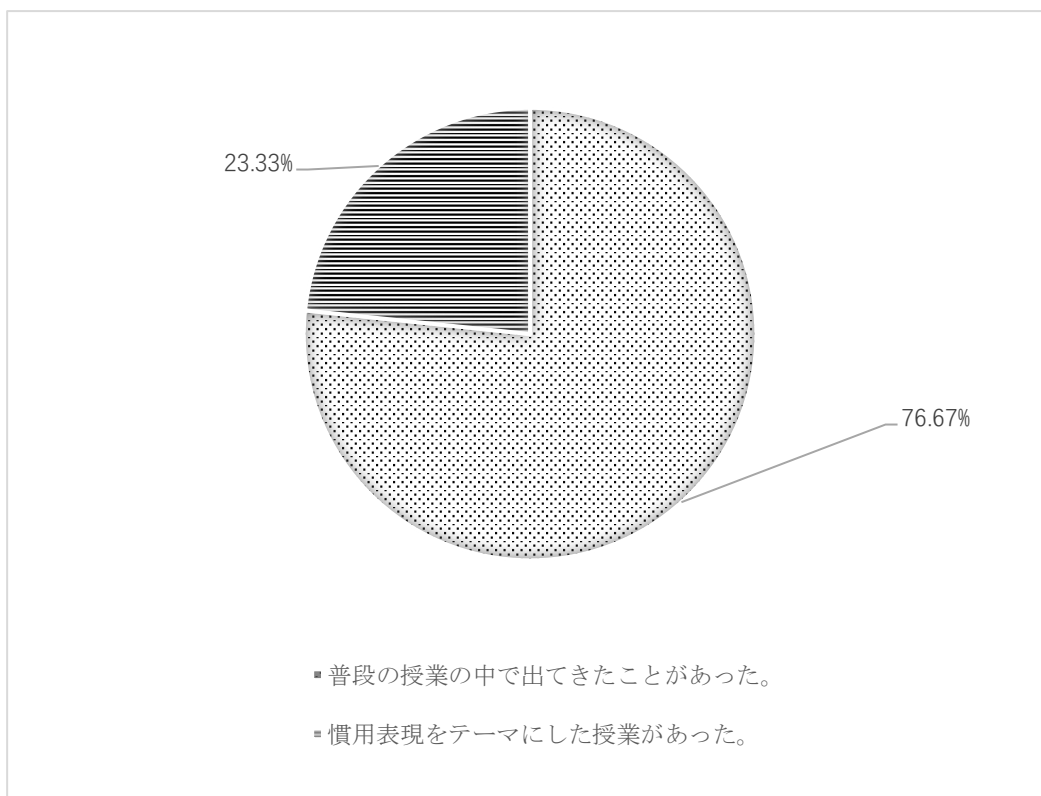


図5 質問3 「日本語学習中に授業で慣用表現を学ぶ機会はあるか」の回答

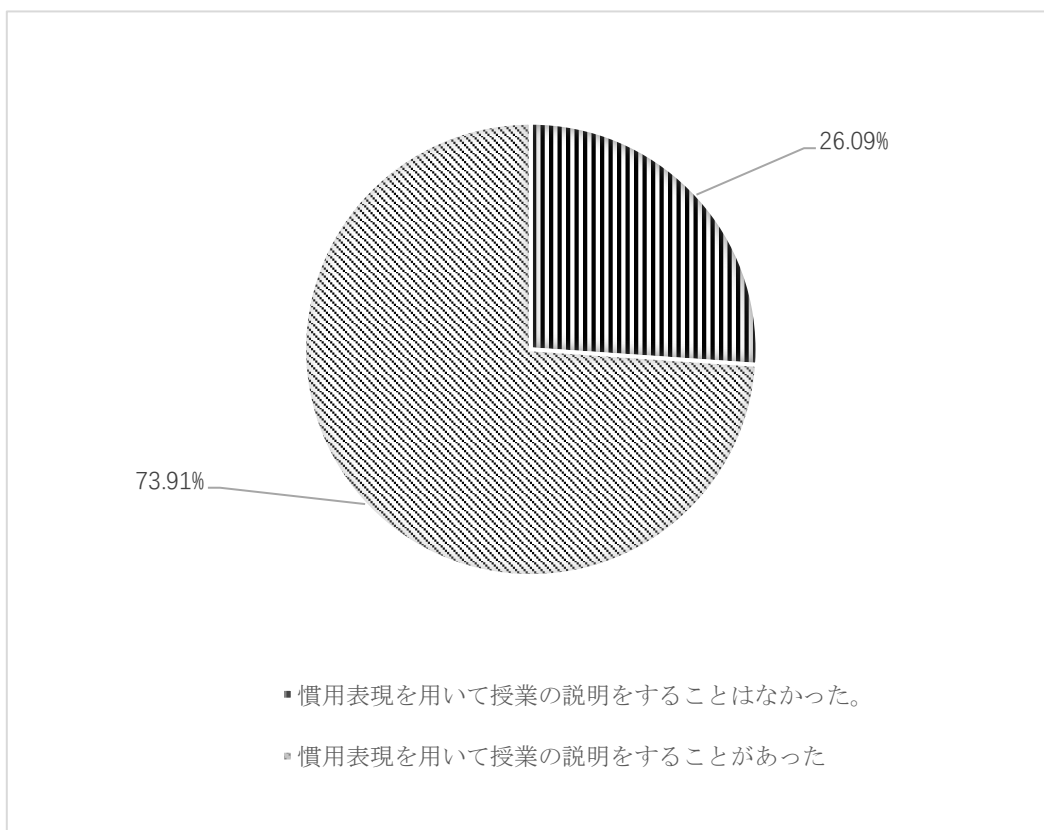


図6 質問3 「教師が慣用表現を説明するか」の回答

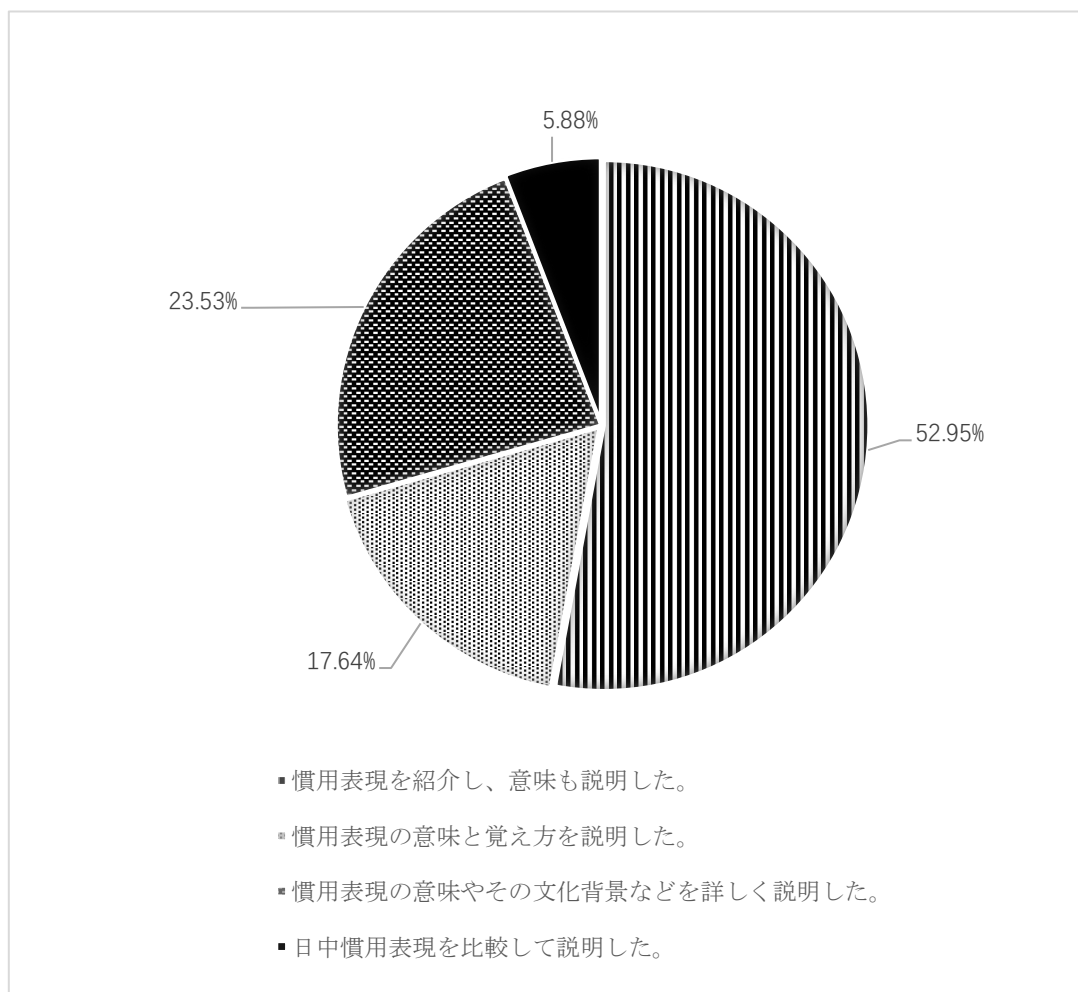


図7 質問3「慣用表現の説明方法は何ですか」の回答

4.2.2 慣用表現の理解度

慣用表現の理解度を確認するにあたり、まず、調査対象者の現在の日本語レベルを確認した。以下の表8のように、日本語能力試験²⁵のレベルN1からN3までの合格状況に基づいて、学習者を三つのレベルに分類した。そして、慣用表現選択問題は図8のように20問を立てた。

²⁵ 日本語能力試験 <https://www.jlpt.jp> 日本語能力試験は日本語母語としない人の日本語能力を測定認定する試験であり、日本語能力試験にはN1、N2、N3、N4、N5の5つのレベルがある。N1が最高レベルである。

以下の慣用表現はどのような意味だと思いますか。		
「顔に泥を塗る」		
A 面目を失わせる	B 顔に汚いものをつける。	C 顔を黒くする

図 8 慣用表現選択問題の例

上記の例の問題の正答は A である。正答すれば 1 点で、すべてに正答すれば 20 点となる。慣用表現選択問題の回答状況から各レベルの学習者の平均得点を計算したところ、N1 レベルの学習者は平均 13.41 点、N2 レベルの学習者は平均 13.2 点、N3 レベルの学習者は平均 12 点と、日本語能力が高いほど正答率が高いことがわかる。しかしながら、どのレベルの学習者においても正答率そのものはそれほど高くなく、N1 に合格していても慣用表現はそれほど理解していないことが窺える。

表 8 レベルごとの平均点

レベル	人数	最低点	最高点	平均点
N1	17	7	19	13.41
N2	10	5	19	13.2
N3	3	7	16	12
総計	30	5	19	12.87

以下は、20 問の選択問題の回答状況をより具体的に分析したものである。まず、問題の正答率を整理し、問題ごとの正答率をもとに、表 9 のように正答及び誤答の原因について分析した。

表 9 正答と誤答の原因分析

順番	慣用表現	正答数	誤答数	正答率 (%)	正答及び誤答の原因分析
1	顔に泥を塗る	26	4	86.67	文字通り「顔に泥を塗る」という意味で、泥を顔につけると汚れてしまう。つまり、相手に恥をかかせてしまう。顔に泥を塗ることは中国では昔は祝福の意味だったが、後に黒は不幸を意味するようになり相手に恥をかかせるという意味になる。直接対応する中国語は存在しないも

					の、意味が類似する表現があるため間違えにくい。
2	目がない	16	14	53.33	文字通り「目がない」という意味である。「目がない」と見えないため、判断力を失ってしまう。 中国語では「観察力が鈍く世渡りができない」という意味である。同じ目がないといっても、意味がずいぶん違ってくるので、誤解されてしまう。
3	口がうまい	2	28	6.67	文字通り「口を拭く」という意味である。日本語では「悪いことをして知らないふりをする」という意味になる。中国語には「吃干抹淨」という慣用表現があるが、これに近い慣用表現である。しかし、意味は甘い汁を吸って、責任を取らないということである。実際には似たような意味なのに違いがあるので間違えやすい。
4	耳が痛い	27	3	90	文字通り「耳が痛い」という意味である。中国には似たような慣用表現はないが、「耳が痛い」という慣用表現は孔子の「忠言耳に逆らう」からきている。 同じ中国の文化だから中国人も耳が痛いほど理解できる
5	足が早い	15	15	50	中国語は似たような慣用表現がないため自然に字面から「何かのために奔走して、歩くのが速いで行ったり来たりする」という意味を誤解して、実際には「物が売れる」という意味では字面とはまったく関係がない。
6	鼻が高い	21	9	70	日本では「鼻が高い」と自慢という意味があるが、中国でも似たような意味がある。鼻を高くすることで人を軽蔑していることを表す。中国には人相説が多く、鼻が高いといい顔になり、金運を招くといわれている。まったく同じ表現だが、意味が異なるため、誤答した可能性がある。
7	腹が煮える	16	14	53.33	日本語では腹の中が沸騰しているようでとても怒っていることを表す。中国語には似たような用法はないが、字面から意味が想像できる場合がある。また、似たような慣用表現の意味を間違えて覚えている可能性も考えられる。「腹を縫る」、「腹を抱える」は大きく笑うことという意味である。それ以外に、煮という字から食事に関する内容を連想しやすいことも考えられる。
8	顔に紅葉を散らす	24	6	80	大部分が正答を選べる。中国語には似たような言い方がたくさんある。顔が赤くなったと言えば恥ずかしいという意味だとすぐに連想されるに違いない。
9	腹を括る	14	16	46.67	似ている慣用表現「腹を切る」があつて、混同

					しやすい。また、抉るという働詞を使っている ので腹の中のものを抉るような感じがするから 連想して素直に人に本音を言うという意味であ る。実際には人の心を見抜いて鋭い質問をする。
10	足を洗う	26	4	86.67	中国語には「足を洗う」という慣用表現はない が、似たような「金盆洗手」という慣用表現が ある。形は違っても意味は同じであり、足と手 もつながりやすいことから大部分が正答であっ た。
11	口に蜜あり、 腹に剣あり	27	3	90	中国語には「口蜜腹剣」とまったく同じ表現が あるので、日本語慣用表現の意味がわかりやす い。
12	腹が減る	21	9	70	文字通り「ダイエット」の意味と誤解されやす いが、基礎的な慣用表現なので、ほとんどの学 習者が慣用表現を学習しており意味がわかる。
13	手を取る	14	16	46.67	「取る」には多くの意味があるため、この慣用 表現の意味を連想しにくい。中国語にも似たよ うな言い方はない。構成が複雑ではない慣用表 現は実は覚えにくい。意味は「手をつないで親 しみを持って指導する」という意味である。
14	足が出る	8	22	26.67	文字通り「足が外に出る」という意味で、中国 語の浮気と似ているので誤解しやすい。また、 言葉の意味から、別の分野に進むという意味に もなる可能性がある。
15	腹が大きい	27	3	90	文字通り「腹が大きい」という意味だが、実は 度量が大きいという意味である。中国語には 「宰相肚里能撐船（宰相が腹の中で船を後押し できる）」という慣用表現があり、理解しやす い。
16	手が早い	21	9	70	文字通り「手が速い」という意味から自然に連 想される処理がてきぱきしているという意味で ある。中国語にも似たような言い方があるので 間違えにくい。
17	頭が低い	21	9	70	文字通り「頭が低い」という意味である。この 言葉の働作を見ても、丁寧さや謙虚さを表すと すぐにわかる。しかし、頭を下げる感覚は落ち 込むという意味もあるので、誤解を招くことが ある。
18	腹に落ちる	4	26	13.33	文字通り「腹に落ちる」という意味である。日 本語で「腹」という言葉は人の心や考えを表 す。そのため、心にじっくり落としこまれると いうイメージである。中国語には似たような慣 用表現があるが意味が異なり「心が落ち着い て心配がない」という意味となるため、誤用 が生まれやすい。
19	目が肥える	11	19	36.67	文字通り「目が肥える」という意味である。 「肥える」には「豊かで、善し悪しを見分ける

					能力が高まる」という意味があり、目が肥えるという意味が理解できる。しかし「肥える」という言葉の意味を知らないと、誤解が生じやすい。字面から、「視野が広がる」という意味に誤解を与える。
20	足が乱れる	7	23	23.33	文字通り「足が乱れる」という意味だが、「足」とは「交通」のことであり、「乱れる」は「秩序が悪い」という意味である。この慣用表現を字面から理解するのは難しい。また、中国語の慣用表現には似たような「乱了陣脚」という慣用表現がある。意味は「予定をかき乱す」である。

表9の通り、1、4、6、8、10、11、12、15、16、17は正答率が高いことが分かる。その理由としてはまず、中国には全く同じ慣用表現或いは似た慣用表現があるからである。次は、文字通りの意味からさらに深い意味を引き出すことができる。また、文化的に意味が理解できる。一方、2、3、5、9、13、14、18、19、20は正答率が低くなっている。その理由は、まず、慣用表現における語彙が分からないからだろう。次に、中国語には似たような慣用表現があるが、表す意味が全く違うという理由も考えられる。また、中日の文化の違いによる誤用の可能性もある。それ以外に、字面から実際の意味を推測するが、実は全く関係がないので間違いを起こしている可能性も考えられる。

4.2.3 アンケート調査のまとめ

まず、学習者は慣用表現にいろいろな方面から触れることができるが、学習と使用程度は極めて低いことが明らかになった。また、日本語教育現場において慣用表現の教育は存在するものの、頻度は高くなく、詳しい説明もなされていないことが明らかになった。そのため、調査対象者は慣用表現の理解度が低いことが明らかになった。つまり、学習者の慣用表現に対する理解は、主に字面の意味、中日の異なる文化、似たような慣用表現、中国の慣用表現の影響を受けていることが分かる。次章からは、本章の結果をもとに、慣用表現の導入方法を探っていく。

第五章 慣用表現の教育実践

第四章の予備調査から、中国人日本語学習者は「同形異義」と「異形同義」の慣用表現の正答率が低い、すなわち中国人日本語学習者にとって特に習得が難しいと予想されることから、本章では、「異形同義」及び「同形異義」の慣用表現に焦点を当て、異なる三つの指導を実践することとする。そして指導前及び指導後に行うテスト結果からその効果を測定する。

5.1 授業の設計と実施

5.1.1 研究対象

異なる三つの指導法については、中国語を母語とする中国人日本語学習者 30 人のうち日本語能力 N2 レベル以上を対象とする。なお、日本語能力 N2 レベルとは以下に示す通り「日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる」（日本語能力試験公式ホームページより）²⁶である。

表 10 日本語能力試験 認定の目安

日本語レベル	認定の目安
N1	幅広い場面で使われる日本語を理解することができる
N2	日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる
N3	日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる
N4	基本的な日本語を理解することができる
N5	基本的な日本語をある程度理解することができる

N3 では、「日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる」であり、本研究における教育実践では、実際の指導は中国語を用いるものの、慣用表現の理解には一定の日本語レベル以上を有していなければのレベルが一定以上でなければ教育実践が出来ない。そのため、N2 の基準を参考として、N2 レベル以上の学習者を対象に研究を行う。また、本研究では、一定時間の授業を受講させてその効果を測定することから、N2 レベルの学習者のうち、日本語のスキルを向上させ、言語文化の知識を深めたいと考えている者や、中国で今後も日本語学習を継続させたいと考えている学生を対象とすることとした。

²⁶ 日本語能力試験 <https://www.jlpt.jp>

5.1.2 慣用表現のテストの作成

予備調査と足に関する慣用表現の分析により、「同形同義」、「同形異義」、「異形同義」の三つのタイプの慣用表現のうち、「同形異義」と「異形同義」の慣用表現の理解に大きなばらつきがあることが明らかになった。これらは、学習の難易度が高く、教育の役割が重要であることから、本教育実践で用いる慣用表現のテストでは「同形異義」及び「異形同義」の慣用表現について行うこととした。「同形異義」や「異形同義」の慣用表現から、次の表 11 のように 30 の慣用表現を選定した。

表 11 テストで用いた慣用表現

番号	日本語の慣用表現	中国語の慣用表現
1	足が地に着かない	脚不沾地
2	足下に火が付く	火燎腿
3	足を踏み入れる	插一脚
4	浮き足立つ	慌了手脚
5	足を洗う	洗手不干
6	足が地に着かない	悬空八只脚
7	手足を伸ばす	放开手脚
8	手足となる	情同手足
9	手取り足取り	手把手
10	手のひらを返す	翻手为云, 覆手为雨
11	手が長い	手脚不干净
12	手が早い	心应手, 手应心
13	目を凝らす	眼皮也不眨一下
14	目を白黒させる	翻白眼
15	流し目を送る	使眼色
16	目の色を変える	令人眼红
17	目をくらます	打马虎眼
18	目が肥える	有眼光
19	目をむく	横鼻子竖眼
20	目と鼻の先	眼皮子底下
21	目の皮がたるむ	上眼皮和下眼皮打架
22	口が滑る	口滑
23	口が重い	口重
24	口が多い	口多
25	口を濡らす	口含黄连过日子
26	口が軽い	口开见喉咙
27	口をたたく	夸下海口
28	口に任せる	满嘴跑火车
29	口が減らない	笔头不硬嘴头硬
30	口の端に上る	担口舌

そして、李（2020）²⁷のアンケート調査を一部参考にして、図9のようにテストを作成した。問題は30問であり、100点満点とする。

図9 指導前後のテストの例

以下の慣用表現の正しい使い方はどれですか。

「足が地に着かない」

- A. 友達の仕事を手伝うために、この事務所からあの事務所まで、一日中足が地に着かない。
- B. 初めての舞台上で、上がってしまい、足が地に着かない。
- C. 考え事をしていて、足が地につかず、転んでしまいました。

5.1.3 指導の方法

本教育実践は音声を含む動画をオンラインで配信して行う。まず10人ずつ三つのグループに分ける。そしてそれぞれのグループの学習者が異なる方法で慣用表現を学ぶ。前述した通り、認知言語学の理論を用いた慣用表現の教育方法も存在するが、実際の慣用表現指導の試みは行われていない（劉・楊2018）ため、実際にその効果を測定すべく認知言語学的手法を用いた指導を実践する。また、「同形異義」及び「異形同義」の慣用表現の指導法として、中国で一般的に行われている指導法として「中日慣用表現の比較法」がある（劉2020）²⁸ものの、実際の教育成果についての報告がなされていないことから、「中日慣用表現の比較法」も実践し、その効果を測定することとする。さらに、予備調査においてこれまでの授業での慣用表現の指導方法は慣用表現の意味と例文だけを説明して覚えるという「暗記法」であることが明らかになった。そこで、本研究においては、これら「認知言語学的手法」、「中日慣用表現の比較法」、「暗記法」の三つの教育実践について比較を行うこととする。表12のように、例えばグループ1の学生はまず10個の慣用表現をそのまま暗記するよう指示する。次に、認知言語学的手法を用いて別の10個の慣用表現を学ぶ。最後に、中日慣用表現の比較法で別の10個の慣用表現を学ぶ。このようにして、それぞれのグループが三つの異なる導入法によって慣用表現を学び、どの導入法が最も効果的かを検証する。グループ2、グループ3も同様に、表12のように行う。

²⁷ 李心雨（2020）「中国日語学習者の慣用句習得研究—以動詞慣用句為中心」

²⁸ 劉丹鳳（2020）「中日与眼相关的慣用語語彙対照及対日漢語教学研究」

表 12 グループ分けと指導法

被験者 慣用表現	グループ 1 (10 名)	グループ 2 (10 名)	グループ 3 (10 名)
問題 1～10	暗記法	中日慣用表現の比較法	認知言語学的手法
問題 11～20	認知言語学的手法	暗記法	中日慣用表現の比較法
問題 21～30	中日慣用表現の比較法	認知言語学的手法	暗記法

5.2 指導の具体的方法

本節では、前節で述べた三つの教育実践方法における「暗記法」、「認知言語学的手法」、「中日慣用表現の比較法」の具体的な授業内容について説明する。以下では、「足を踏み入れる」という慣用表現を例にとって説明する。なお、以下の方法は、慣用表現そのものと例文以外においてはすべて中国語を用いている。また、それぞれの時間に大きな差が出ないように、全ての動画を1分程度に統一した。

5.2.1 暗記法

暗記法は比較的直観的な学習方法であり、慣用表現の意味を中国語で直接説明し、その慣用表現を使う例文を説明して、学生にその慣用表現を文脈の中で理解させる。この慣用表現は主に意味と例文を暗記することによって学習される。以下の表 13 は暗記法を使って行った指導の過程である。

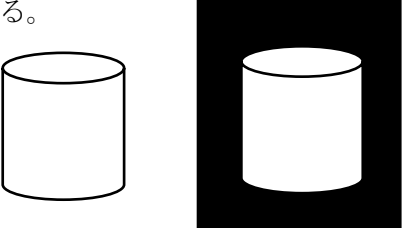
表 13 「足を踏み入れる」の教案（暗記法）

手順	指導の過程
導入	慣用表現「足を踏み入れる」を学生に紹介する。
解説	「入り込む。また新たに関係するようになる」という意味を説明する。
例示	この慣用表現を使った例文の中国語訳を与える。 例：①彼女は13歳で芸能界に足を踏み入れる。中国語の意味：「她在13岁就进入了娱乐圈。」 ②存者たちを解放するため、彼女は危険な地域に足を踏み入れることを決意する。中国語の意味：「为了解救生存者，她下定决心涉足危险的领域。」
練習	学生に「足を踏み入れる」を使って作文をすることを求める。
まとめ	学生に「足を踏み入れる」という意味を覚えさせ、慣用表現を生活で使うことを勧める。

5.2.2 認知言語学的手法を用いた教授法

認知言語学では、「語義は人間の認知と外部世界との相互作用に由来し、言語は本質的にメタファー的である」（劉 2020）と考えられている。慣用表現の実際の意味は複雑であるため、慣用表現の意味を理解するには語義、修辞、社会政治経済の各方面の文化を考慮しなければならない。身体慣用表現の授業では、認知言語学におけるメタファーとメトニミーの仕組みを利用することで、身体に関する慣用表現を身につけることができる。漢字の基礎がある中国の学生にとって、慣用表現の字面を理解することは難しくないが、字面に基づいてどのように慣用表現の意味を理解するかは少し難しい。そのため、慣用表現を教える過程で、学生を字面の意味から慣用意味の連想に、抽象概念から具体的な印象の連想に転化させる。例えば、「足」を含む慣用句の意味分析では、まず「足」の基本的な意味を説明し、その上で派生的な意味を説明することで、慣用表現の本当の意味を連想することができる。また、認知言語学におけるイメージスキーマを用いて説明することで、慣用表現の意味を覚えやすくし、その上で例文の説明を行い、慣用表現の記憶を深めていく。以下の表 14 は認知言語学を使った慣用表現の指導の過程である。

表 14 「足を踏み入れる」の教案（認知言語学的手法）

手順	指導の過程
導入	慣用表現「足を踏み入れる」を学生に紹介する。
解説	<p>① この慣用表現の足の意味「動物や歩行を支えるために使われる部分」であることを説明する。</p> <p>② 学生に「足を踏み入れる」はどこに入った様子で、そこで新しい領域へ進入するかを連想させる。</p> <p>③ この慣用表現は「入り込む。また新たに関係するようになる」という意味であることを説明する。</p> <p>④ 図 10 の容器イメージスキーマを示し、慣用表現と容器イメージスキーマの関係について「左の円柱は『足』を意味し、右の円柱の外側の黒い長方形は未知の領域、または新しい関係であることを意味する。円柱から黒い長方形に囲まれた円柱の意味は未知の領域、または新しい関係に入る。」と説明する。</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">図 10 「足を踏み入れる」の容器イメージスキーマ</p>
例示	この慣用表現を使って文を作り中国語の意味を与える。

	例：①彼女は13歳で芸能界に足を踏み入れた。中国語の意味：「她在13岁就进入了娱乐圈。」 ②存者たちを解放するため、彼女は危険な地域に足を踏み入れることを決意した。中国語の意味：「为了解救生存者，她下定决心涉足危险的领域。」
練習	学生に「足を踏み入れる」を使って作文することを求める。
まとめ	学生に「足を踏み入れる」の認知過程を学習して「足を踏み入れる」の意味を覚えさせ、慣用表現を生活で使うことを勧める。

5.2.3 中日慣用表現の比較法

第二言語習得の過程において、母語干渉の現象が存在する。奥野（2005）は「言語転移とは、母語やそれ以外にこれまで習得した言語と目標言語の類似点及び相違点から、学習者の意識的・無意識的な判断により、目標言語の応用や習得の過程に現れる影響のことである²⁹」と述べる。そのため、中日の慣用表現の異同点を比較することで、学習者の判断を指導し、慣用表現の学習に積極的な影響を与えるように促している。「母語干渉は通常、正の転移と負の転移に分けられる。母語が目標言語に近く、それを促進する場合は正の転移、そうでない場合は負の転移となる」（郭・楊・王・張 2022）³⁰。中日慣用表現には同形同義、同形異義、異形同義の慣用表現が数多く存在する。中日共通の内容に対する理解が深まり、正の転移が出現し、日本語慣用表現の理解と記憶を促すことができる。誤解を生みやすい日本語の慣用表現を解説することで、負の転移を防ぐことができる。また、中日の慣用表現を比較することを教えると、中国人日本語学習者は日本語の慣用表現が母国語と似ていることを見て、日本語の慣用表現を学ぶことへの不安が減り、日本語の慣用表現を学ぶことへの興味が高まることが期待される。以下の表 15 は中日の慣用表現の比較法を使って行った慣用表現の指導の過程である。

表 15 「足を踏み入れる」の教案（中日の慣用表現の比較法）

手順	指導の過程
導入	慣用表現「足を踏み入れる」を学生に紹介する。
解説	「入り込む。また新たに関係するようになる」という意味を説明する。
比較	中国語の慣用表現で「足を踏み入れる」に似た慣用表現「插一脚」を紹介し、「插一脚」の意味は「何かに関与したり、他人のことに干渉したりすることのたとえ」であることを説明する。学生にこの二つの慣用表現は字面か

²⁹ 奥野由紀子（2005）「第二言語習得過程における言語転移の研究——日本語学習者による『の』の過剰使用」風間書房

³⁰ 郭嘉、楊蕾、王爽、張丹（2022）「母語遷移対二語写作複雑度的影響」

	から見れば似ているが、意味は全く異なり、慣用表現の意味を文字通りに理解してはいけいと強調する。
例示	この慣用表現を使って文を作り中国語意味を与える。 例：①彼女は13歳で芸能界に足を踏み入れた。中国語の意味：「她在13岁就进入了娱乐圈。」 ②存者たちを解放するため、彼女は危険な地域に足を踏み入れることを決意した。中国語の意味：「为了解救生存者，她下定决心涉足危险的领域。」
練習	学生に「足を踏み入れる」を使って自分の文を作ることを求める。
まとめ	学生に中日の慣用表現の比較させることで、「足を踏み入れる」という意味を覚えさせ、慣用表現を生活で使うことを勧める。

5.3 実践の結果及び分析

5.3.1 授業前後の比較

授業前後の成績を比較すると、以下のようになる。

表 16 グループ1の指導前後成績

学習者	指導前成績	指導後成績
1	135	110
2	75	90
3	55	120
4	65	85
5	60	90
6	75	90
7	45	130
8	90	120
9	45	30
10	60	120
平均成績	70.5	98.5

表 16 から分かるように、調査対象者 1 と 9 を除く 8 名において、指導後の成績が上昇した。そして、平均正答率の成績を比較すると、指導前の 70.5 点から指導後 98.5 へと大幅に上昇しており、指導の効果が認められる。同様に、グループ 2 についても以下に記す。

表 17 グループ 2 の指導前後成績

学習者	指導前成績	指導後成績
1	65	120
2	55	60
3	80	110
4	75	95
5	50	55
6	55	55
7	65	70
8	50	70
9	45	70
10	30	95
平均成績	57.0	80.0

表 17 から分かるように、すべての調査対象者において、指導後の成績が上昇した。平均正答率の成績を比較すると、グループ 1 同様、指導前の 57.0 点から指導後 80.0 へと大幅に上昇しており、指導の効果が認められる。

表 18 グループ 3 の指導前後成績

学習者	指導前成績	指導後成績
1	135	110
2	70	85
3	45	70
4	70	90
5	35	45
6	70	40
7	70	110
8	50	70
9	25	70
10	60	120
平均成績	61.0	87.0

表 18 から分かるように、すべての調査対象者において、指導後の成績が上昇した。平均正答率の成績を比較すると、グループ 1 及びグループ 2 同様、指導前の 61.0 点から指導後 87.0 へと大幅に上昇しており、指導の効果が認められる。

つまり、グループ 1、2、3 すべてのグループにおいて、指導後の成績は学習者の成績も上昇しており、指導の有効性を確認することができた。

5.3.2 三つの指導法の比較

この三つの授業方法を用いた場合の平均正答率は、指導前後の三つのグループの各問題の正答率を整理したものだが、それぞれのグループの成績を比較する。

まず、グループ1の前後テストの平均正答率の比較である。表19を見ると、指導開始前のテストでは、学習者の正答率は平均48%だった。ところが、指導後のテストでは、学習者の平均正答率が66%まで上昇した。そのため、指導方法が正答率にプラスの影響を与えていることが明らかになった。具体的には、暗記法、認知言語学的手法、中日慣用表現の比較法の三つの異なる方法を使用した。表20、21、22のように、暗記法を用いたところ、平均正答率は6%上昇し、認知言語学的手法を用いた場合は、平均正答率は36%上昇した。そして、中日の慣用表現比較法の場合、平均正答率は11%上昇した。つまり、認知言語学的手法がグループ1の正答率を高めるのに最も効果があることが明らかになった。

表19 グループ1の指導前後正答率の比較

指導前 テストの番号	指導前正答率 (%)	指導後 テストの 番号	指導後正答率 (%)
1	40	1	20
2	30	2	40
3	10	3	40
4	60	4	60
5	50	5	60
6	50	6	60
7	20	7	20
8	40	8	70
9	50	9	70
10	80	10	90
11	90	11	80
12	20	12	60
13	30	13	50
14	30	14	50
15	90	15	80
16	70	16	90
17	30	17	80
18	70	18	70
19	50	19	70
20	50	20	80
21	70	21	70
22	40	22	90
23	70	23	70

24	40	24	60
25	30	25	80
26	70	26	100
27	80	27	70
28	20	28	90
29	40	29	40
30	10	30	60
平均正答率	48		66

表 20 グループ 1 における「暗記法」の指導前後の正答率の比較

	指導前テストの番号	指導前正答率(%)	指導後テストの番号	指導後正答率(%)
	1	40	5	60
	2	30	2	40
	4	60	3	40
	6	50	12	60
	7	20	8	70
	8	40	6	60
	10	80	11	80
	21	70	19	70
	26	70	30	60
	27	80	24	60
平均正答率		54		60

表 20 から分かるように、グループ 1 における「暗記法」の指導前後の正答率を比較すると、平均正答率は 6% 上昇した。

表 21 グループ 1 における「認知法」の指導前後の正答率の比較

	指導前テストの番号	指導前正答率(%)	指導後テストの番号	指導後正答率(%)
	12	20	13	50
	14	30	9	70
	18	70	18	70
	19	50	17	80
	22	40	25	80
	23	70	22	90
	25	30	23	70
	28	20	26	100
	29	40	28	90
	30	10	29	40
平均正答率		38		74

表 21 から分かるように、グループ 1 における「認知法」の指導前後の正答率を比較すると、平均正答率は 36%上昇した。

表 22 グループ 1 における「比較法」の指導前後の正答率の比較

	指導前テストの番号	指導前正答率 (%)	指導後テストの番号	指導後正答率 (%)
	3	10	1	20
	5	50	4	60
	9	50	7	20
	11	90	10	80
	13	30	14	50
	15	90	16	90
	16	70	15	80
	17	30	21	70
	20	50	20	80
	24	40	27	70
平均正答率		51		62

表 22 から分かるように、グループ 1 における「比較法」の指導前後の正答率を比較すると、平均正答率は 11%上昇した。

つまり、認知言語学的手法がグループ 1 の正答率を高めるのに最も効果があることが明らかになった。

次に、グループ 2 の前後テストの平均正答率は表 23 のようになる。指導開始前のテストでは、学習者正答率は平均 38%だったが、指導後のテストでは、平均正答率が 53%にまで上昇した。このことから、指導方法が正答率にプラスの影響を与えていることが明らかになった。表 24、25、26 のように、三つの異なる方法の前後の成績を比較したところ、暗記法を用いた学習者の正答率は平均 5%減少し、認知言語学的手法を用いたところ、学習者の正答率は平均 35%上昇した。また、中日の慣用表現比較法を用いた場合、平均正答率は 16%上昇した。これらの結果から、グループ 1 と同様に、グループ 2 においても認知言語学的手法が最も効果的だったことが分かる。

表 23 グループ 2 の指導前後正答率の比較

指導前テストの番号	指導前正答率 (%)	指導後テストの番号	指導後正答率 (%)
1	20	1	10

2	0	2	80
3	30	3	80
4	40	4	50
5	30	5	50
6	50	6	60
7	40	7	10
8	20	8	70
9	30	9	50
10	80	10	40
11	50	11	90
12	30	12	80
13	20	13	30
14	40	14	30
15	80	15	70
16	60	16	40
17	30	17	50
18	50	18	40
19	40	19	80
20	70	20	70
21	70	21	30
22	0	22	70
23	40	23	50
24	40	24	60
25	10	25	40
26	0	26	100
27	40	27	40
28	70	28	50
29	40	29	20
30	20	30	60
平均正答率	38		53

表 24 グループ 2 における「暗記法」の指導前後の正答率の比較

	指導前テスト の番号	指導前正答率(%)	指導後テスト の番号	指導後正答率(%)
	3	30	1	10
	5	30	4	50
	9	30	7	10
	11	50	10	40
	13	20	14	30
	15	80	16	40
	16	60	15	70
	17	30	21	30
	20	70	20	70
	24	40	27	40

平均正答率		44		39
-------	--	----	--	----

表 24 から分かるように、グループ 2 における「暗記法」の指導前後の正答率を比較すると、平均正答率は 5 %減少した。

表 25 グループ 2 における「認知法」の指導前後の正答率の比較

	指導前テスト の番号	指導前正答率(%)	指導後テスト の番号	指導後正答率(%)
	1	20	5	50
	2	0	2	80
	4	40	3	80
	6	50	12	80
	7	40	8	70
	8	20	6	60
	10	80	11	90
	21	70	19	80
	26	0	30	60
	27	40	24	60
平均正答率		36		71

表 25 から分かるように、グループ 2 における「認知法」の指導前後の正答率を比較すると、平均正答率は 35%上昇した。

表 26 グループ 2 における「比較法」の指導前後の正答率の比較

	指導前テスト の番号	指導前正答率(%)	指導後テスト の番号	指導後正答率(%)
	12	30	13	30
	14	40	9	50
	18	50	18	40
	19	40	17	50
	22	0	25	40
	23	40	22	70
	25	10	23	50
	28	70	26	100
	29	40	28	50
	30	20	29	20
平均正答率		34		50

表 26 から分かるように、グループ 2 における「比較法」の指導前後の正答率を比較すると、平均正答率は 16%上昇した。

つまり、グループ2においても、グループ1同様に認知言語学的手法が正答率を高めるのに最も効果があることが明らかになった。

最後に、グループ3の前後テストの平均正答率の比較を以下でみていく。

表 27 グループ3の指導前後正答率の比較

指導前 テストの番 号	指導前正答率 (%)	指導後 テストの 番号	指導後正答率 (%)
1	20	1	60
2	30	2	60
3	30	3	30
4	40	4	60
5	20	5	40
6	60	6	80
7	20	7	80
8	60	8	50
9	30	9	10
10	60	10	80
11	60	11	40
12	20	12	80
13	30	13	20
14	40	14	70
15	40	15	90
16	50	16	5
17	40	17	40
18	50	18	50
19	40	19	70
20	50	20	80
21	70	21	90
22	20	22	40
23	50	23	60
24	50	24	70
25	10	25	40
26	30	26	60
27	70	27	90
28	60	28	70
29	60	29	50
30	10	30	30
平均正答率	41		58

表 27 を見ると、指導前のテストでは、学習者の正答率は平均 41%だったが、指導後のテ

ストでは、学習者の平均正答率が 58%まで上昇したことから指導がプラスの影響を与えていることが分かる。

表 28 グループ 3 における「暗記法」の指導前後の正答率の比較

	指導前テスト の番号	指導前正答率(%)	指導後テスト の番号	指導後正答率(%)
	12	20	13	20
	14	40	9	10
	18	50	18	50
	19	40	17	40
	22	20	25	40
	23	50	22	40
	25	10	23	60
	28	60	26	60
	29	60	28	70
	30	10	29	50
平均正答率		36		44

表 28 から分かるように、グループ 3 における「暗記法」の指導前後の正答率を比較すると、平均正答率は 8%上昇した。

表 29 グループ 3 における「認知法」の指導前後の正答率の比較

	指導前テスト の番号	指導前正答率(%)	指導後テスト の番号	指導後正答率(%)
	12	20	13	20
	14	40	9	10
	18	50	18	50
	19	40	17	40
	22	20	25	40
	23	50	22	40
	25	10	23	60
	28	60	26	60
	29	60	28	70
	30	10	29	50
平均正答率		36		44

表 29 から分かるように、グループ 3 における「認知法」の指導前後の正答率を比較すると、平均正答率は 35%上昇した。

表 30 グループ 3 における「比較法」の指導前後の正答率の比較

	指導前テスト の番号	指導前正答率(%)	指導後テスト の番号	指導後正答率(%)
	1	20	5	40
	2	30	2	60
	4	40	3	30
	6	60	12	80
	7	20	8	50
	8	60	6	80
	10	60	11	40
	21	70	19	70
	26	30	30	30
	27	70	24	70
平均正答率		46		55

表 30 から分かるように、グループ 3 における「比較法」の指導前後の正答率を比較すると、平均正答率は 9% 上昇した。

つまり、グループ 1 及び 2 同様、グループ 3 においても、認知言語学的手法が正答率を高めるのに最も効果があることが明らかになった。

5.4 本章のまとめ

この三つの指導方法を比較すると、正答率の平均的な伸びに違いが見られることが分かった。以上のデータから、次のような結論が得られる。

まず、三つのグループすべてにおいて、慣用表現の指導後の成績が上昇した。次に、三つのグループの学習者に慣用表現の指導を行ったところ、平均正答率が上昇した。中でも、認知言語学的手法を用いて学習した学習者の平均正答率の向上が最も顕著だった。これは、認知言語学的手法が、学習者の慣用表現テストの正答率を向上させるのにより積極的な役割を果たしていることを意味している。認知言語学的に手法では、慣用表現を身体語彙の基本義や派生義と連想することを強調し、容器イメージスキーマによって学習者の理解と記憶を強化する。これは、認知言語学習がよりよい理解と分析能力を提供し、学習者が慣用表現をより深く理解できたためではないかと推測される。対照的に、慣用表現をそのまま暗記したグループは、平均正答率の上昇に限界があり、グループ 2 においては、正答率が下がっていた。これは、慣用表現の理解や応用を高めるには、暗記する方法に限界があることを示唆している。暗記法は、単に内容を機械的に覚えるだけで、慣用表現の中の文

化や文脈を無視している可能性があるため、指導直後では記憶に残っていても、長期的には記憶に残っていない可能性がある。一方で、中日の慣用表現の比較法を用いた指導法では、認知言語学的手法には及ばないものの、平均正答率が上昇した。これは、中日の慣用表現を比較することで、学習者が中日の慣用表現の違いやつながりをよりよく理解できるようになり、理解力が向上し、また記憶にも残りやすいことを示している。

これらの結果から、三つの慣用表現の導入の中でも、認知言語学的手法を用いた指導法が、慣用表現テストの正答率を高めるのに効果的であることが明らかになった。そこで、慣用表現の授業において、認知言語学の指導方法をより多く取り入れ、今回慣用表現の教育実践を参考として、身体語彙の基本義と派生義から慣用表現の意味を連想するように認知プロセス、容器イメージスキーマを作ることによって慣用表現を導入することを提案する。

第六章 結論

本論文は「日本語教育における慣用表現の導入—中日慣用表現の身体部位の比較を通じて」をテーマに、中日の身体部位の慣用表現を比較分析し、それを基礎として中国人日本語学習者に対する日本語教育においてどのように慣用表現を導入すべきかについて探求してきた。まず、先行研究において「足」に関する慣用表現についての中日比較分析が十分に行われていなかったことから、「足」についての慣用表現の比較分析を行った。また、先行研究及び予備調査から、日本語の慣用表現指導において、「認知言語学的手法を用いた指導法」と「中日慣用表現の比較法」、「暗記法」の可能性が示唆されたが、どの方法が最も効果的であるかについては明らかになっていなかった。そこで、予備調査の結果に基づいて、特に習得が難しいと予想される「異形同義」及び「同形異義」に焦点を当て、中日辞書から身体部位を含む慣用表現を選び出した。そして、上述の三つの異なる指導法を用いて指導し、その効果を測定することとした。

その結果、まず、指導前後のテストの成績から、すべての慣用表現の指導法には効果があることが明らかになった。中でも、認知言語学的手法を用いた方法が最も効果的であり、次に中日慣用表現の比較法が効果的であることが明らかになった。暗記法については、一部において、指導前より成績が下がる場合があった。このことから、中国語母語話者に対する慣用表現の理解においては、認知言語学的手法が望ましいことが明らかになった。

今後の研究では、認知言語学的手法を用いた慣用表現の導入からさらに発展させ、実際の運用場面への応用、つまり理解から産出に目を向けて、日本語のコミュニケーション能力を向上させるための指導法についても検討・実施する必要がある。すなわち、具体的な教室活動や異文化コミュニケーションといった応用場面において、どのように慣用表現の産出を促進するかを探求していきたい。これらを通じて、中国における慣用表現教育にさらに貢献していきたい。

参考文献

日本語文献

- 有菌智美 (2006). 「分解可能な慣用表現における身体部位詞の意味拡張」『日本認知言語学会論文集』. 6. pp. 1-6.
- 有菌智美 (2008). 「分解不可能な慣用表現の慣用的意味の成立<身体の状態 (の変化) > から<精神状態 (の変化) > への意味拡張」『日本認知言語学会論文集』. 8. pp. 263-273.
- 有菌智美 (2013). 「行為フレームに基づく「目」、「耳」、「鼻」の意味拡張——知覚行為から高次認識行為へ」『名古屋学院大学論集. 言語・文化篇』. 25. (1). pp. 123-141.
- 奥野由紀子 (2005). 『第二言語習得過程における言語転移の研究——日本語学習者による『の』の過剰使用』. 風間書房.
- 国広哲弥 (1985). 『慣用句論』. 日本語学.
- 後藤秀貴 (2019). 「精神の座としての「腹」: 身体部位詞の通時的観察と認知言語学的分析」『言語文化共同研究プロジェクト』. 2018. pp. 23 - 35
- 白石大二 (1950). 『日本語のイディオム』. 三省堂.
- 中村明 (1985). 『慣用句と比喩表現』. 日本語学.
- 辻 幸夫 (2002). 『認知言語学キーワード事典』. 研究社.
- 榎山洋介 (2001). 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」『認知言語学論考』. (1). pp. 29-58
- 森薫葉 (2018). 「身体部位詞を含む慣用表現に関する認知言語学的研究——首と neck の比較を中心に」『東京女子大学言語文化研究』. 27. pp. 86-113
- 宮地裕 (1982). 『慣用句の意味と方法』. 明治書院.
- 林八龍 (2002). 『日韓両国語の慣用表現対象研究: 身体語彙慣用句を中心として』. 明治書院.
- 山田孝雄 (1951). 『日本文学概論』. 宝文館.
- 山梨正明 (1995). 『認知文法論』. ひつじ書房.
- 吉田則夫・文洪涛 (1999). 「身体語を含むについての日中対照研究——「頭」の場合」『岡山大学教育学部研究集録 / 岡山大学教育学部学術研究委員会 編』. (110). pp. 105-109
- 吉田則夫・文洪涛 (2003). 「身体語を含むについての日中対照研究——『目』の場合」『岡山大学教育学部研究集録 / 岡山大学教育学部学術研究委員会 編』. (124). pp. 93-

曹少敏 (2012). 「身体部位語による慣用表現の認知研究—『顔』の意味拡張を中心に」.
魯東大学. 未公刊.

陳大偉 (2013). 「日中両語における身体語彙「顔」と“脸”の慣用表現に関する対照的研究」.
中国海洋大学. 未公刊.

鄧娟娟 (2012). 「日本語教育における基本慣用句選考の試み」.
華中科技大学. 未公刊.

呂選選 (2013). 「『口』に関する中日両国慣用句の比較考察」.
青島大学. 未公刊.

屈凌 (2014). 「『腹』に関する慣用句の日中対照研究—認知言語学の視点から」.
上海交通大学. 未公刊.

謝家貴 (2004). 「日本語の慣用句に関する表現及び身体語彙の日中対照」『西南民族大学
学報』. 10 期.

王蓓蕾 (2016). 「日中慣用句対比研究——「目」と「口」を中心に」.
北京林業大学. 未公刊.

翟林欽 (2016). 「身体語彙「頭」を含む慣用句の日中対照研究—認知言語学の視点から」.
西安外国語大学. 未公刊.

趙傑 (2007). 「面部語彙に関する中日慣用句の対比研究——『目』、『口』を中心に」.
大連海事大学. 未公刊.

張永 (2009). 「身体語彙『目』に関する中日慣用句の対照研究」.
大連海事大学. 未公刊.

外国語文献

陳光磊 (2001). 『漢語詞法論』.
上海学林出版社.

範馨馨 (2018). 「从認知語言学的角度分析中日以『口』為中心的慣用語的意義」.
東北林業大学. 未公刊.

郭嘉・楊蕾・王爽・張丹 (2022). 「母語遷移対二語写作複雜度的影響」『当代日語研究』.
3 期. p 140.

胡裕樹 (1962). 『現代漢語』.
上海教育出版社.

李心雨 (2020). 「中国日語学習者の慣用句習得研究—以動詞慣用句為中心」.
黑竜江大学. 未公刊.

劉丹鳳 (2020). 「中日与“眼”相关的慣用語語彙对比及対日漢語教学研究」.
南昌大学. 未公刊.

- 劉立華 (2013). 「日本語慣用句の特徴及教学策略」『佳木斯教育学院学报』. 12 期. p 355
- 劉立華・楊紫 (2018). 「認知理論指導下的日本慣用語的教学策略探究—以『目』類慣用語為例」『黑龍江教育(理論与实践)』. 11 期. pp. 84 - 85
- 馬国凡 (1961). 『諺語歇后語慣用語』. 遼寧人民出版社.
- 馬国凡・高歌東 (1982). 『慣用語』. 內蒙古人民出版社.
- 米麗萍・劉仲微 (2013). 「日本語慣用句の特徴浅釈」『蘭州教育学院学报』. 1 期.
- 邵小麗 (2014). 「論日語“足”類慣用語的漢語表达」. 南京農業大学. 未公刊.
- 沈麗君 (2009). 「中日『手』『足』慣用語对照研究」. 南京農業大学. 未公刊.
- 王桂花 (2011). 「身体語彙的慣用句的中日比較研究—以眼為中心」. 蘇州大学. 未公刊.
- 于鑫 (2021). 「足を含む日中慣用句の对照研究」長春工業大学. 未公刊.
- 周凡琪 (2021) 「漢字在日本的傳播和日本文字的発展」『僑園』. pp. 94-95
- 朱世波・葛曉昱 (2013). 「認知語言學在日語慣用語教育中的応用」『教育探索』. 1 期
- Lakoff, George, and Mark Johnson. (1980) “The Metaphorical Structure of the Human Conceptual System.” Cognitive Science, vol. 4, no. 2, Apr.

辞典

- 三省学編修所 (1987) 『実用ことわざ慣用語辞典』三省堂
- 白石大二 (1977) 『国語慣用語大辞典』東京堂
- 新村出 (1955) 『広辞苑』岩波書店
- 米川明彦・大谷 伊都子 (2005) 『日本語慣用語辞典』東京堂
- 李茂・陳光磊 (2004) 『漢語熟語辞典書系：漢語慣用語辞典』漢語大詞典出版社
- 羅竹風 (1986) 『漢語大辞典』漢語大詞典出版社
- 温端政 (2004) 『中国慣用語大全』上海辞書出版社
- 温端政 (2011) 『中国慣用語大辞典』上海辞書出版社

付録

付録1：第四章予備調査で実施したテスト

問題	慣用表現	選択肢	正答
1	顔に泥を塗る	A. 面目を失わせる B 顔に汚いものをつける C 顔を黒くする	A
2	目がない	A. 空気が読めない B. 視力のない人を指す C. 判断する力や能力がない	C
3	口を拭う	A. なんか悪い事をしていながら素知らぬふりをする。B. 甘い汁を吸って、責任を取らない C. 汚れた口をきれいに拭う	A
4	耳が痛い	A. 音が大きすぎてうるさく感じられる B. 他人の言葉が自分の弱点をついていて、聞くのがつらい C. 耳が炎症を起こした	B
5	足が早い	A. あることのために奔走する B. 毎日早く起きる C. 商品などの売れ行きがよい	C
6	鼻が高い	A. 金運が良い人を指す B. 誇らしい気持ちである C. ある地域で高い地位を占めている	B
7	腹が煮える	A. 激しく怒っている B. おかしくてたまらず大笑いする C. たくさん食べて腹が膨れた	A
8	顔に紅葉を散らす	A. 顔が日に焼けて赤くなった B. アレルギーで赤面している C. 恥ずかしくて顔が真っ赤になる	C
9	腹を括る	A. 会計上の責任を帯びて損失を自弁することをいふ B. 相手に正直になり、本音を伝える C. 人の意中を見とおして鋭く問い尋ねる	C
10	足を洗う	A. 汚れた足をきれいに洗う B. 悪いおこないや悪い仲間とのつながりをやめて、まじめに生活すること。C. あることのために、わざわざ出向く	B
11	口に蜜あり、腹に剣あり	A. おいしい者を食べたが、お腹が苦しくなってきた B. 口では本当の事を言っている、しばらくする言い返す C. 口ではやさしいことを言うが、心の中は陰険であること	C
12	腹が減る	A. 空腹になる B. 子供を産む C. ダイエット	A
13	手を取る	A. 親切に教え導くようすにいう B. 何かに取り掛かる C. 続いていた関係を断ち切るなどして退く	A
14	足が出る	A. 浮気する。自分の恋人を裏切る B. 自分の知らない領域を大胆に飛び越える C. 赤字になる	C
15	腹が大きい	A. 腹の肉が多い B. 度量が大きい C. 気性が激しい	B
16	手が早い	A. 腕前や技量が進歩する B. 食物などが腐りやすい C. 物事をてきぱきと処理する	C
17	頭が低い	A. 気分が落ち込む何にも気が乗らない B. 記憶力が悪くなる忘れ物ばかりする C. 他人に対して、謙虚で、丁寧である	C
18	腹に落ちる	A. 流産する B. 心がしっかりしていて、心配もない C. なるほどそうだと思う。	C
19	目が肥える	A. よいものを見慣れて、よしあしを見分ける力が増す B. 視野が広がり、スケールが大きくなる C. 何らかの理由で目が腫れてきた	A
20	足が乱れる	A. 道を間違えたり道に迷ったりする B. 事故などで交通機	B

		関が乱れる C. 周りの友人や同僚と打ち解け合わない	
--	--	----------------------------	--

付録 2：第五章指導前後のテスト

問題	慣用表現	選択肢	正答
1	足が地に着かない	A. 友達の仕事を手伝うために、この事務所からあの事務所まで、一日中足が地に着かない。 B. 初めての大会で、上がってしまい、足が地に着かない。 C. 考え事をしていて、足が地につかず、転んでしまいました。	B
2	足下に火が付く	A. その選手は足下に火が付けて猛スピードで完走しました。 B. 李さんに何か聞きたいことがありましたが、李さんは足下に火が付いたように教室の外へとびだして行きました。 C. 仲間が逮捕され、ついに彼も足下に火が付いた。	C
3	足を踏み入れる	A. あの子は悪い仲間に誘われて、ヤクザな世界に足を踏み入れてしまった。 B. 私たち二人の間のことなのに、楊さんはいつも足を踏み入れるので、ますます厄介になる。 C. わがチームは張り切って球場へ足を踏み入れる。	A
4	浮き足立つ	A. 15 時間働き続けて、浮き足立った B. 試合で自分たちのチームが不利と見てみな浮き足立った。 C. 十億円を騙し取られたと知って、浮き足立ったような気がする。	B
5	足を洗う	A. 彼は長年よくない仕事をしていたが、結婚を機に足を洗った。 B. 存者たちを解放するため、彼女は危険な地域に足を洗うことを決意する。 C. 彼は友達のために足を洗って 10 万円貸してあげた。	A
6	手足を伸ばす	A. 新しい職場では手足を伸ばして、思い切ってやります。 B. たまの休みなのでリゾート地で手足を伸ばして疲れを取りたいと思う。 C. 作品の受賞の知らせを聞いて彼女は手足を伸ばす。	B
7	手足となる	A. 手足となって働いてくれた部下を失った。 B. 彼らは結婚して 30 年、手足となりました。 C. 私たちは血がつながっていませんが仲良く手足となったようにです。	A
8	手取り足取り	A. この快報を聞いて、姉妹は手取り足取りして飛び上がりました B. その高い山を登るために、険しい山道を手取り足取りして歩いてきました C. 当スポーツジムは、手取り足取り指導しますので必ず痩せますよ	C
9	手のひらを返す	A. 彼は拾ったものを落とし主に手のひらを返す B. いつもは貧乏だと言っているんですが、会計になると手のひらを返して、おごってあげるんです C. なぜこれまで私を支えてくれた健太君が、ここに来て手のひらを返したのか分からない	C
10	手が長い	A. あの人には手が長いから、どんな人も助けてあげます B. 財布に気をつけてください、ここは手が長い人が多いので	B

		す C. 彼は手が長いので、友達が多い。	
11	手が早い	A. 彼は背が高くありませんが、手が早く、走るのも早い。 B. あの新入社員は仕事の手が早く、社内ですぐ有名になった C. 自分が手がけた仕事は、手が早くて、周りにすぐ迷惑をかける。	B
12	目を凝らす	A. 理科室から物音がするので、誰かいるのかと目を凝らして見てみた。 B. 弟は雨が降るたびに窓の前に座って目を凝らしていました C. このシーンは周りの人が立ち止まって目を凝らして、あれこれと騒いでいる	A
13	目を白黒させる	A. 中国人は目を白黒させる人は、心がきれいで、未来の計画ができています人だと考えます。 B. お正月にお餅をあわてて食べたら、喉につまってしまって、目を白黒させた。 C. あいつがまた自分のことを吹聴し始めたので、困って目を白黒させる	B
14	目が高い	A. お目が高いと店員さんに言われて、気付けば不要なものを沢山買ってしまっていた。 B. 李さんは目が高いので、いまだに適当な仕事が見つかりません。 C. あの人は目が高くて、いつも他の人は自分より劣っていると思っています。	A
15	流し目を送る	A. 彼が落とし物をしたので、流し目を送ったがずっと気づかない B. 電車の向こう側の席の人があまりに感じのいい女だったので、思わず流し目を送ってみた C. 彼は長い間パソコンを使っていたので、ずっと休んでいなかったなので、流し目を送る。	B
16	目を晦ます	A. その男の子がきれいなドレスを着ているのを見て、目を晦ます。 B. あの部屋に入ってくるなり、周囲に異常がないか目を晦ます。 C. 最新のゲーム機を買うために父の目を晦まして財布からお金を取った。	C
17	目が肥える	A. 沢山の名画に囲まれて育ったので、彼は評論家並みに目が肥えている B. 新入社員は目が肥えていて、上司が言うとなすぐに仕事を完成させるそうです。 C. 彼氏と別れて一晩中泣いて、目が肥える。	A
18	目を剥く	A. あの事故で目に重傷を負ったので、目を剥いて義眼にしなければなりませんでした。 B. あの二人のいやらしいことを見ていると、目を剥きたくなりました。 C. 普通の人なら、こんなことをされたら顔色を変え、目を剥くことだろうが、彼は違ったのだ	C
19	目と鼻の先	A. あのひとと話をするのが嫌で、彼はいつも自慢ばかりし	B

		<p>て、目と鼻の先のように嘘をつきます。</p> <p>B. 先週まで足を骨折して入院していた。入院中は目と鼻の先にある飲み物を取ることも難しい状況だった。</p> <p>C. 子供たちは授業の前に、「目と鼻の先でふざけた顔をするな、邪魔になるぞ」と先生に言われます。</p>	
20	目の皮がたるむ	<p>A. 前日のパーティーに参加して興奮した夜よく眠れなかったので、今日は授業中ずっと目の皮がたるんでいる。</p> <p>B. 気になることを言ったのか、彼女は目の皮がたるんで、黙って泣き始めました</p> <p>C. サトシさんが意気揚々と笑っているのを見てみると、何も言いたくなくて、目の皮がたるんでいます。</p>	A
21	口が滑る	<p>A. 普段は口が滑るくせに、授業中の質問に答える時になると、何も言いません</p> <p>B. 友人に、そのかばんは偽物なのではないかと口が滑って言ってしまったが、言わなければよかった。</p> <p>C. 口が滑るために、彼はよく夜も明けないうちから外で早口言葉を読む練習をします</p>	B
22	口が重い	<p>A. 他人のことはよく話すのに自分のことになると口が重い。</p> <p>B. 彼は口が重いので、料理をするたびに醤油と塩をたくさん入れます</p> <p>C. 昨日の件で言い過ぎて口が重くなりました。申し訳ありませんが、気にしないでください</p>	A
23	口を濡らす	<p>A. かわいそうな女の子は3日も食事をしていませんでしたショーウインドウのケーキで口を濡らしていました</p> <p>B. 最近唇が乾きがちなので、リップクリームを買って口を濡らしました。</p> <p>C. あの子は口を濡らす生活をしているように見えたが、実際には大きな家を持っている。</p>	C
24	口が減らない	<p>A. 母は口が減らない人で、ご飯を食べたばかりなのに、すぐまたお腹が空いたといいます。</p> <p>B. あいつは口が減らないから、何か内緒を話したら、明日にでもみんな知ってしまいますよ</p> <p>C. 理屈ばかり並べて口が減らないやつだ。いまに友達も減って、いなくなってしまうぞ。</p>	C
25	口の端に上る	<p>A. 彼女はミニスカートををはいてただけで、口の端に上る。</p> <p>B. 直前言うとしたことを、口の端に上って忘れてしまいました。</p> <p>C. 彼にも口の端に上って言えないことがあります。</p>	A
26	口に任せる	<p>A. 彼は以前の友好的な態度とは一転して、新しく入ってきた上司に口に任せて、全く上司の気持ちを考えません。</p> <p>B. 自分のことをしていればいいので、他人の口に任せる。</p> <p>C. みんなは彼が口に任せてでたらめなことを言っていると知っている。</p>	C
27	頭が固い	<p>A. 本当はできないのですが、口に出してしまったのですから、頭が固くなって頑張ることにしました。</p> <p>B. ぼくの父は頭が固いので、パソコンは子どもに必要ないと言って、買ってくれない。</p>	B

		C. 頭が固いからといって、壁にぶつかるわけにもいきません	
28	頭でっかち 尻つぼみ	A. たった 1 杯飲んだだけで、頭でっかち尻つぼみになり、 バランスを崩してしまいました B. そのカフェはオープン当初は賑わいを見せていたが、最 近では客足が悪く閉店する予定だそうで、頭でっかち尻つぼ みだった。 C. 内緒でゲームソフトを買ったが頭でっかち尻つぼみで、 レシートを見つけられ、母におこられた。	B
29	頭に来る	A. あの人はいつも約束を破るから頭に来る。 B. ビールを 3 杯飲むといつも頭に来る。 C. 注意事項はしっかりと頭に来て行動しよう。	A
30	頭が上がら ない	A. 何度も勉強した文法なのに、なかなか頭が上がらない。 B. あの人にはいつも助けてもらっていて、頭が上がらない。 C. 体育の得意な A 君にはいくらがんばっても頭が上がらな い。	B

謝辞

本論文を執筆するにあたり、ご指導を頂いた卒業論文指導教員の松岡知津子先生、PM教員西村訓弘先生と八神寿徳先生に心より感謝致します。論文テーマの決定から完成するまで、心構えや、研究方法などを丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。論文表現の誤りを数多くご指摘をしていただきまして、心から深く感謝申し上げます。

また、アンケートに回答してくださり、教育実践に協力してくださった多くの方々や、活発に議論に参加し、いろいろと手伝ってくれた友人達、日本留学全般を応援してくれた両親、この論文作成にあたり力を貸してくださったすべての方々に感謝の意を表します。